

分泌が過大になると巨人病となつて、七尺八尺といふ様な不細工な體になり顔も馬の様に長くなる。後葉のホルモンはピチエイトリンと名づけられ、腎臓や乳汁の分泌を調節する。間腦の上面に突出せる松果腺のホルモンは鳥や哺乳類では生殖器の早熟を防いで居るものといはれ、七歳で陰莖も巨大で陰毛の生えた兒などでは此の腺に腫物が出来て居つたといふ報告もある。生殖巢の内分泌作用に就いては別に述べるが、脾臓のランゲルハンス氏細胞島といはれる部分もインシュリンといふ内分泌物を出す所といはれ、之れの分泌が悪いと糖尿病となるし、又糖尿病には脾臓の此の部のエキスであるインシュリンの服用や注射がきくと稱せられる。總じて内分泌腺は藥局の様なもので、有効成分は此處で製劑されて血液に混じて全身を廻る刺戟物質であるから、他動物から取つたものでも人間に效く所に妙味があるし、又血液から尿に出る事も合理的な事であるので、殊に腦下垂體のホルモンの如きは今日馬や人の尿から精製されるのも不合理ではない。唯ホルモン剤の注射や内服ではその效が一時的であるを免れないので、内分泌腺の移植の方が永續的な效があるといふ事になるわけである。

生殖巢が内分泌作用を兼ねて居る事はブラウンセカール等も夙に力説した所で老いるから生殖巢が悪くなるといふよりも、むしろ生殖巢の作用が衰へるから老衰の徴をひきおこすのだとい

ふ。ゲーテの如きは八十二歳で「ファウスト」第一部を完結した後にも、なほ二十歳のマリアンネ・ユングと熱烈な戀にふけたといふし、反對に詩僧アベラールもエロイズとの戀愛問題の結果四十歳で去勢されたら一節の詩さへつくれなくなつたといふ。ワインのスタイナーハ等の研究によると、精巢の内分泌物を出すのはレイデオツヒ氏細胞一名間細胞と言はれる細胞群であつて、即ち輸精管を途中でしばつて切斷すると生殖細胞は退化して精蟲も出来ない様になり、その代りに間細胞群が増殖して來るが、之れに伴つて體の諸部に若返りが起り、性慾の外に毛もつやつやくなり、元氣になつて壽命も少しのびたといふ。又精巢を腹膜に移植したり、精巢にX光線をかけた際にも生殖細胞は退化し間細胞が増殖するが、それでちゃんと若がへりが起るから間細胞の群こそ生殖巢の内分泌腺だといつてこれに思春腺といふ名をつけて居る。此の間細胞説には反對説もあり、ヴォロノフ等は其の點には觸れぬ様にして居るが、老衰した人や獸に若い獸の生殖巢を移植して若がへらせる手術に於てはヴォロノフの方が一歩進んで居るともいへるのであつて、即ち氏のは成るべく自然の位置に移植して、又之れに注ぐ血管を再生させる様に努力して居る點に特色があるのであるが、人間になら若い黒狸々の生殖巢を、男になら精巢、女になら卵巢を移植して若がへらせた成功の例を澤山擧げて居る。又高價な牛や馬や羊に就いても澤山手術して經濟的にも大層功を成した事を報告して居る。説教を作る氣力のなくなつた僧侶を若がへら



して聖職を續行し得させたのなどは自慢してもよさうだが、中には婦人が夫の爲め家庭の爲めとて手術を受けながら、あまり元氣になつて、「夫の許に歸つても甲斐がないから、歸らん」といつたといふ様なのはどうかと思はれる様な、例まで擧げて居る。

老衰の組織學的徵候として、各器官の専門の役目をする細胞が退化して、専門の仕事の出來ぬ結締細胞がその代りに蔓るからだといふのは大抵の學者の一致して居る處であるが、メチニコフはその専門の細胞が退化するのは食細胞が之れを喰ふからであるとし、毛の白くなるのをまで——老年の白髪も、冬季に白化する動物のをも——食色素細胞が毛の色素を喰つて毛根から脱出するからだと言つて居るが、之れは少しゆきすぎで、體内の組織に於てさへ、いくら食細胞といへども、健康な細胞をばさう易々と喰へるものではないらしく、蝌蚪の尾の吸収されてゆく所など観察して見ると、先づ組織細胞がくづれて無定形になつた後に喰細胞は集つて來て後始末をするもの様だし、まして毛の様な壽命の短いものでは、毛の細胞自身の變形した食色素細胞等といふ妙な起原の細胞を待たずとも、色素形成力の強かつた毛の脱けあとに色素形成力の衰へた毛が生え代る場合の方が、一般的である事を私は季節的白化の場合にも、老年の白髪の場合にも見て居る。併し人間が、アルコールとか梅毒とかいふ様なものに動脈硬化其の他の老衰状態を促進

さして、天壽を縮めて居る例の多い事は氏の説く所の通りであらうと思ふ。高等動物では所謂若返り法が局部的一時的若がへりにすぎないで、大して天壽を延す程の效のない事も多くの人の説く如くであらうが、分裂生殖毎に若返つて自然死といふものが起らないといふ單細胞生物の多くの場合などは人間の及ばぬ所とあきらめて、も一つだけ若返へり法を述べて擧筆する事としやう。その若返り法といふのは斷食式ともいふべき傾向のもので、つまりミノット等のいふ核の支配すべき細胞内分質がたまりすぎると、核の支配がゆきとゞかぬ様になると、細胞は不活潑な老衰状態になるといふ説に根據を有するものであつて、チャイルド等の實驗した様にカウガヒビル等も斷食させると、細胞の蓄積物が生活のエネルギー源として消費されるから、體は随分小さくなるが、其の後は非常に新陳代謝作用が敏活になつて若いものと同様になり、再び生長するから、之れをくりかへすと随分長く生きるといふのである。人間でいへば、チフスの後などにかへつて丈夫になるのも同じ様な現象だらうと思ふが、程度の問題でデリケートな事ではあるが、合理的な斷食療法といふものも成り立ち得ない事でもあるまいといふ様にも考へられる。

併し人間の様な精神的な生物にあつては何にしても、精神の持ち様に支配される範圍の廣い事は勿論忘れ得ない重要事である。



## 生物學から觀た民族の發展

史家はエジプトが亡び、ユダヤが亡び、バビロンが亡び、ペルシヤが亡び、フェニシヤが亡びたと云ひ、詩人は國破れて山河有りと言ふが、有るのは山河だけではない。國の亡びる時には戦死者も多いし又大虐殺も行はれた例が多いけれども、人民を全部殺すといふやうな事は人間として出来る事でもないし、又亡ぼしたつもりでも、野にかくれ山に潜んで再び繁殖するといふ妙用も生物には有るのであるから、民族の末流は残るのである。早い話がユダヤは亡びて久しいが、ユダヤ人といふものは歐米各國に殖えて、特殊な宗教的習慣を維持した結社をなして、金權を握つて國家の痛となつて居るが、追ひ出されても、いぢめられても泣き寝入りの外はないのである。それは中心がないからである。人や金は多くとも、中心があつて統一するのでなければ國家としての作用は出来ないものである。ヒトラーが民族の淨化を強調したのは、この中心への強固なる統一を強調したのに外ならない。それも必要であるが、一方に國の中心を支持する人民の數が多くなければ手足の不自由な人のやうなもので、國家の發展は望まれない。茲に人口問題が起るのは當然である。しかも千人力といふやうな優秀な人民が多くなれば鬼に金棒であるので人口問題と

いふ中には自ら素質の向上の問題も入つて來るのである。

先づ民族淨化の問題から考へて見るが、一體民族とは何ぞやといふ事を考へて見ると之は随分あいまいな言葉であるといはざるを得ない。現實に於ては一つの國の國民が皆同一の民族であるといふ考へを持つ人は少ないからこそ民族の淨化といふやうな論が出て來るわけであるが、扱て同一民族とは何であらうか。親子兄弟親族といふやうなものは普通に同一民族の中に入る事を疑ふ人はないので、これをおしひるめると少くとも同じ祖先から出た子孫は同一民族であるといふ事は疑はない人が多いのであらう。併し親と云つても祖先と云つても、父方と母方と兩方あるわけであつて、夫婦は必ずしも同一民族であるとは限らないのであるから、實は上述の事も變なものである。昔は血統をやかましく言つて異民族間の結婚は却々起らなかつた等といふ人もあるかも知れぬが、それは事實にあてはまらないやうである。宗教や風俗、習慣、言語といふやうなものがあまりちがつて居る間は、さういふ間の結婚は少かつたかも知れぬが、人は移動する者でもあるし、郷に入つては郷に従へといふ順應力も強い者であるから、日常生活的に一致した異民族の間には相當に結婚も多かつたであらう。同氏婚せずといふ信念が昔からあつたのでなほさらである。

言語や風俗が異つて居る間でも戦勝者や有力者が婦女を略奪して子を生ましめた例は歴史上に



澤山あるので、體質的に混合して居る量の極めて多い事は何國に於ても否定し得ない所である。歐洲でも皇室がすでに婚を諸國に相求めて居る事は明かな事實で、國民間の混血は普通の事で白色民族の混血のみならずロシア、ハンガリア、獨逸にはモロコ人種の血の入つた者も多いし、黒人の血も南方から入つて居る。米國となると、もつと混血してインディアンや黒人との混血兒も居る。無人島だつた所では何回もの漂着人がいやもおうも言つて居られずに混血して人口の殖えたる歴史の明かに知られる例が澤山あり、わが小笠原島などでもわかつて居る所では、西紀一八三〇年にハワイから諸白人がカナカの婦人を連れて來たのがはじまりで、次の十年間に、英、葡混血兒、黒人等がポリネシヤの女を連れて入り、一八六〇年頃から日本人が入り次第に人口も殖えたので、純日本系も居るが、白人、黒人、ポリネシヤ人、日本人間の雜種もかなり居る事は否定出來ないのである。支那でも何回か所謂境外の夷狄に征服もされて居る位で、混血兒の多い事は争はれないし、日本といふ島國にも一回だけ人間が入つて、全國民が皆其子孫であるとは言はれない事は學者でなくとも承認して居るであらう。有史以來になつても、漂着人や歸化人が何回も入つて來た事は明瞭で、その子孫も澤山に殖えて居る事も争はれない。今日では半島人も日本人であるが、言語、習慣、衣服といふやうなのが内地人に馴化した者では殆んど内地人と見分けがつかないのもあつて、よく内地人のつもりで結婚したら半島人だつた事がわかつたといふやうな事が

新聞に出る事もあるし、法律上の結婚をしないでも子の出來て居るのも有るであらうと思ふ。戀愛といふ魔力がある以上、或程度までは混血も許さざるを得ないのであつて、要は日本帝國の中心たる天皇の赤子の心を有し、日本風に馴化した者は、皆日本人であるとしなければならぬのであると思ふ。幸に日本帝國では國の御柱が神代に既にきまつて、君臣の分定まり、萬世一系の天子が諸種族を赤子の様に愛撫し給うたので四海よく同化して、異民族の混合といふ跡だにわからぬ様になつたのは誠に有難い事である。

尤も混交といふ事も程度の問題で、白人と黒人とか、日本人と黒人とかいふ間の混交は子孫に到つてもメンデル式の分離が目立つて、心を暗くする例も多いけれども、極東民族などの所謂民族の違ひといふ内には、言語、風俗習慣、衣服等の違ふ爲めの差別が大きな點であるから、それを同化する事が先決問題で、さういふ皮相を取去つて見れば、混交の害は割合に少いのではないかと思はれる。尤も私は現在の習慣風俗のまゝで結婚せよといふのでは勿論ないので、日本人はあくまで日本精神に徹する者としなければならぬといふ點に於ては國民の淨化を叫ぶ者である。そして日本の歴史はその可能性を指示して居ると思ふのである。

思ふにヒトラーが民族の淨化を叫んだのはユダヤ人が特殊な宗教をも捨てず、豚を食はないとか色々頑固な風習を持續して同化し得ないのを排斥しようとしたのであつて、せまい意味のゲル



マン民族に復歸させやうとしたのではあるまい。さういふ復歸は今更出來ない程混交して居るのであるし、第一ゲルマン民族といふ一定型が實際あつた事さへ明指し得る人がないであらう。アリア血統なる事を證明させる爲めに、數代に溯つてユダヤ人との結婚のなかつた系圖書を提出させて見た所が、最も獨逸的な國民の多數にもユダヤ人的要素の混じて居る事がわかつて驚いたといふ事だが、實際カトリックに改宗して獨逸人と結婚したユダヤ人も多いのであり、又ユダヤ人にも夫々の國の歐洲人の血が混じた者が少くないのであつて、今日ではユダヤ人と言つても國によつて夫々異つて居るさうである。精神的にもつと同化するやうにするなら、ユダヤ人だつて此れ程排斥はされずにすんだであらう。要は心の持ち方で國民としてその國に忠ならざる者は排斥されるのが當然である。

次に人口問題であるが、若し各國が各孤立して、文化の交流のないものならば國民の量よりも質が大切だといふ事は明かであるが、人間には言語文字といふものがあつて、社會的相續財産があり、先人の發明を土臺として發明を重ねて應用してゆくの、皆が皆發明者でなくとも普通の身心を有する者なら多い程仕事が圓滿に進行するのであつて、人が不足ならば所謂人手が足りない爲めに仕事が進まぬ事になるのであるから、質の問題も勿論あつて、優生學とか斷種法とかいふ物も考へなければならぬけれども、その範圍内では、人口の多い國家程強大になり得るのである。

フランスのやうに人口がむしろ減じてゆくやうでは既に身心共に民族的に衰退すべき病的状態に入つたものといはざるを得ないのである。殊に東亞共榮圈の確立に突進しつつある日本にとつては日本精神に燃ゆる人手はいくらでも必要缺くべからざる寶である。幸に日本人は強國中では左表のやうに最も人口増加率が多いのであるが

|     | 出生率  | 死亡率  | 増加率    |
|-----|------|------|--------|
| 日本  | 二六・七 | 一七・四 | 九・三    |
| イタリ | 二二・九 | 一四・七 | 八・二    |
| 獨逸  | 一八・八 | 一一・七 | 七・一    |
| 合衆國 | 一六・九 | 一〇・九 | 六・〇    |
| 英國  | 一五・三 | 一二・六 | 二・七    |
| 佛國  | 一四・七 | 一五・〇 | 〇・五(減) |

日本で死亡率の多いのは結核其他の外に、五歳未満の夭折率が多いのであるから、これを少くする事を一層努力する一方に、出生率も少くとも三〇以上になるやうにしなければならぬ。三〇以上の出生率は決して夢ではないので、ドイツや英國にもあつたのであるし、日本でも昭和十二年にさへあつたのである。今は戰爭中で、若い男子が多數出征して居るから止むを得ぬといふか



も知れぬが、二、三年で歸還さして入れかへても居るわけだし、銃後の男女も多いのであるから、心身を壯健にし、女子もあまり身の榮耀を慾ばらずに、産兒期間を永くして良い子を澤山産んで頂きたいものである。經濟的に不自由ならば不自由なりに、かへつて丈夫に兒は育つものである。砂糖等は徳川時代にはじめて使ふ様になつたのであつて、文明人はむしろ砂糖を使ひすぎゝる爲めに體を悪くして居たのである。ビタミンを含ませぬ精製した砂糖の過食は、血液の酸性化を起し、之を中和する必要上骨や齒のカルシウム分を血液中にとられて、齒や骨の弱い子が出来るのは妊娠中の母の責任なのである。

但しいくら人口がふえればよいといつても、悪質者の殖えるのは國家に莫大な損害を掛ける事は諸國の統計の示す所であるが、日本でもおくれればせながら斷種法の實施にのり出し、悪質者を慎重に審議する委員を設けて、結婚をする事はさまたげないまゝに子供の出来ないやうにするやうに努力をすゝめてゐるから、その點は安心してゐてもよいであらう。斷種法といつても人權を無視するやうなやり方をやるわけではないし、殊に今年希望を申し出た人の中から審議するのだといふからなほさらである。今までの時世に馴れた人にとつてこそ今は非常時であるがこれから物心つく人にとつては、これが常時の状態となるかも知れぬ國際情勢であるから、國家の繁榮なくしては國民の繁榮もない事を悟つて、國家全體の立場から物事を見る習慣を養はねばならぬ。

502である。

### 日本民族の成り立ち

#### 總 說

日本最古の歴史書である所の古事記や日本書紀を読んで、しみじみと悦しく感ずる事は、此等の書が漢文で書かれて居る程、當時既に支那文化に廣く觸れて居た事が明かであるのに係らず、その思想に於てはちつとも支那かぶれして居ないで、所謂和魂漢才で、ちゃんと日本獨特の國體觀念がはつきりしてをり、萬世一系の 天皇を中心として盡忠の日本精神に燃える整然たる民族意識が明かに示されて居る事である。たまた此の精神に反する者が現れても、忽ちに亡ぼされてしまつた。これ偏に 皇祖皇宗の被征服者を遇する御仁徳、八紘一宇の御精神の徳化に外ならない事を歴史は語つて居る様に思はれる。此の御精神が日本民族をこんなに渾然たる一民族に作り上げ給うた要因であると感泣に堪へないのである。人種をいへば、天孫降臨の際にすでに日本に色色な住民のをつた事を歴史は語つて居る。出雲民族の様にかなりによく國土經營の行はれた民族



もをつたのであるのに、それが容易に國讓りの大業が出来たといふ點から見ても天孫が如何にすぐれた神様であつたかは推定せられるのである。高天原は何處であつたかといふ様な今日科學的に決定せられ様のない問題を科學的に決定せんとすることこそ非科學的といふべきである。併し天孫降臨以前の日本先住人は如何なる文化状態にあつたか、天孫降臨後の日本文化は如何に變轉したかといふ様な點を遺物によつて考證するといふのを目の敵の様に毛嫌ひする程狭量であつてはならないと思ふのである。遺物はたゞ文化の交通が驚く程昔からあつた事を示すだけであつて、人種が變つた事を意味すると速断するのではないのである。例へば若し千載の後、今日の日本の遺物が發掘せられたならば、西洋風の物が澤山出るのであらうが、今日の日本人が西洋人になつたのではなく、志氣ますく盛んな日本民族である事は炳として明かなのであると同じ事である。御稜威の下にあつては入つて來る何物もが日本化する、そして日本的なものに創造せられるのが日本の歴史であつた。漢學でも佛敎でも科學でも皆さうであつた。遺物たる石器、銅器、鐵刀、土器、陶器皆それを示して居るのである。人民そのものも亦、皇室を宗家とする根幹に枝と連なつて、打つて一丸となつて日本民族が出来上つたのである。ナチス獨逸では、同じ血は同じ精神、思想を發現するからといふ理由で民族の淨化を企てて居るが、それはユダヤ人の様な同化せざる民族の處置に困り果てての事で、日本を羨ましがつて居るのであつて、國內に痛のない日本

ではそれを眞似する必要もなく、科學に立脚した國民優生法的な民族淨化をやればよろしいといふのは、目出度い國がらである。

### 縄紋式土器時代

日本には舊石器時代即ち磨かない西洋梨子形の石器を主として使ひ、土器を作る事を知らなかつた時代の人間が住んでをつたといふ證據は知られて居ない。即ち日本最古の住民は既に新石器時代文化に入つてをつたのである。當時の遺物は主としては、日常食物とした貝の殻などを捨て集めた貝墟から出るのであるが、肥後壽貝墟其他から小形の馬の齒等も出て居るし、石器、土器、人骨なども方々の貝墟から出て居るが、勿論劍を佩いた天孫の御降臨よりはすつと前で金屬は使用して居ない先住民である。屍體を股關節と膝とで曲げて三屈折式埋葬をして居る例も津雲貝墟(備中)などで知られて居る。此の三屈折式埋葬法や石器の種類や製法などは世界的に大同小異といふほどよく似て居るので、あんなに遠い昔にも、する分廣く文化の交通移動があつた事を示すものと言はれて居る。三屈折にして葬つたのは胎兒の姿にかたどつて靈魂の新生を祈つたのだといふ人と化けて出るのを恐れてしはつたのだらうといふ説とある。

土器は新石器時代に於ける人類の一大發明で、舊石器時代にはなく、今日でも、ピグミーの様



な舊石器時代文化に留つて居る民族もアフリカには有るのであるが、日本の石器時代人は既に石簇、石斧、石棒、石錐、石槍、石劍、石匙、石冠等を有して居たのみならず、種々の形の繩紋土器（龜岡〔陸奥〕土器とかアイヌ式土器とかの名も有る）を有し、紋様の種類などは歐洲のよりも多いといふ位であるし、伴出する石棒も磨製であるから新石器時代の人間だつた事は明かである。埋葬の風の有つた事は前に述べたが、三屈折させて居るのは、靈魂の神祕を畏み、化けて出る様な事のない様に縛つたのではあるまいかといふ人も有る。裝飾の風も有り、貝の腕輪を腕に七、他腕に八もはめてをつた骸骨も出て居る。家畜も多少は持つてをつた事は争はれず、家犬も大小三種位貝墟から掘り出されて居り、馬も肥後の轟貝塚をはじめ薩摩、河内、尾張、三河等の貝墟から出土して居るが、蒙古馬系の小形なものである。食用にもしなかつたとは言へぬが、野馬ではないと思はれる。モールの調べた武藏大森の貝墟では人骨の四肢を四寸位に切り分けであり、肉を抉り取つた痕さへ有るといふので、食人の風があつたのではないかといふが、武器が有る以上は戦ひも有つたであらうから、敵を切つたものとも解釋されるであらう。繩紋式土器は東北に於て顯著な事は事實であるといへ、中部、南部にも廣く分布し、薩摩にも琉球（荻堂）にも有る。薩摩の指宿などではその貝墟の上に更に彌生式土器の貝墟が重なつて居るから、前者の方が時代が古い事も明かである。

### 彌生式土器時代、青銅時代

前述の時代も何千年といふ永い間であつたらうから、別民族の混交もなかつたとはいへない。現にやゝ後代といはれる三河の吉胡貝墟人骨などは津雲貝墟人骨とかなりの差があつて、北海道、アイヌ人と遠くなり、畿内日本人、北陸日本人と一歩近似して來て居るのであるが、彌生式土器時代、青銅時代は別民族的文化の混入がずつと著しいのである。

彌生式土器といふのは赤褐色の、多くは無紋の土器で、鮮滿の貝墟からも廣く出る物で、前時代の繩紋土器の様に黒味を帯びないのは酸化焰で焼いたからだといはれ、又閉鎖した窯で、前時代の天井の開いた窯に於けるよりは火力もやゝ高度で焼かれたものと言はれる。前時代の様に手づかねの物も有るが、又輻轡を用ひた物も有る。よく有溝石斧や石庖丁を伴出する事も、鮮滿の例に似て居る。此れを使用した時代もやゝ永いので、初めは石器時代だつたらしいが、青銅と伴出する場合もある。例へば丹後の函石濱からは、彌生式土器、石器、銅簇、玉類等が同時に掘り出されて居るし、朝鮮の金海貝塚からも、石器や骨器と一所に漢の玉莽の貨泉なども出土して居るので、銅、鐵文化の影響が次第に朝鮮や西南日本に入つて來て、東北地方では石器時代である間に、西南日本では金石併用時代に入り、やがて青銅時代に入つたのである。否、日本の青銅時



代は割合に短くて、後を追ふ様にして鐵器も入つたものらしく、筑前鞍手縣では石簇、貨泉、鐵滓等が共出した所も有り、肥前有喜貝墟の人骨には鐵簇が刺つて居るのに、石器も伴出したし、丹後の函石濱では石簇、銅簇と共に鐵簇も出たのであつて、つまり青銅文化が東北地方に廣まらぬ間に既に西南日本では鐵器をさへ使ふ様になつて、石器を主として使用する部族の有る一方に、銅や鐵の器具を使用した有力な部族も現れたといふ時代が有つた事は争はれないのである。彌生式土器でも金屬器でも、さういふ器物だけが輸入されたのか、さういふ器物を使ひ、製法を知る民族が入つて來たのか、どちらの場合も有り得るわけではあるけれども、やがて日本内地でも其等の製造が行はれた事は確かだ、銅劍の鑄型なども九州から出土して居る。兎に角此の頃には日本と周邊との間に文化の移動が有つて日本古代文化に大影響を及ぼした事は確かであると思はれる。神武天皇の御東征は正にその金石併用時代であること、天孫民族以外に、當時日本に色色な民族の住んで居つた事は歴史の語る所であつて吾々の空想ではない。吾々の知らんとするのは寧ろ天孫民族以外に如何なる民族が日本人の構成に参加したかの點であつて、天孫民族の神話を打ちこはすものではないのである。

最も謎の深い青銅器として銅鐸と稱せられる物が百數十個出土して居る。其の出土地域は、安藝、備中、備前、播磨、石見、伯耆、因幡、丹後、丹羽、若狹、越前、加賀、伊豆、遠江、三

河、尾張、伊勢、伊賀、大和、攝津、和泉、河内、紀伊、讃岐、淡路、阿波、土佐の地方で、九州にも關東や東北にも發見せられない事が、他の器物の移入経路と異つて居る事を思はせられるし、形も周などの鐘鐸狀樂器に似ては居るけれども、壁が薄くて、舌もなく、實用の樂器では無いと思はれ、殊に小形の物に至つては竿にでも釣るして、儀式用の飾りにでもする外にない様な物である。一説に日本に移動した漢民族が先秦の鐘を模造して故郷を偲んだものであらうと言はれる位である。南支から紀伊か土佐にでも船で來た民族が擴めたものかも知れぬと思はれるが、故渡瀨先生は或銅鐸の文様にマレー、佛印邊の生活状態によく似たものを見たと言つて居られた。大陸から日本に船が來るのに必ずしも朝鮮とか、中支から九州や山陰に入るとも限らない一説とも言ふべき例で、南支或は今日の佛領印度支那とかマレー半島の邊から來たものも有り得る事は海路から見ても有りさうな事である。神代の記事に見える常世の國とは今の佛領印度支那の邊だといふ説もある。鬮雞のシヤモはシヤムから來た事を示し、チャボはチャンバから來た事を示すものとか、カボチャはカンボジャから來たとかいふのは近世に渡來したのではあるけれども、神社の建築が古代の住居様式の名残りを留めるもので、鳥居は住宅の雞の留り木の倂だといふ人があるが、雞はどういふ経路をとつて入つたか知らぬけれども、原産地がマレー、印度支那地方な事は定説である。その雞が神代に既に日本に入つてをつた事は明かで、天岩戸の常世の



長鳴鳥とは雞の事なる事は争ふ人がない所である。此度の支那事變で海南島や佛印に行つた人で彼地の土著人の風貌や風俗の日本に似た點の多々有るのに驚いて居る人が澤山有るのである。

銅鉞や銅劍は支那や朝鮮に出るのと似た物もあり、又其等と南洋土人のと共に似たといふ様な物も有るので、此等は朝鮮を通して、或は直接に支那からも入つた物も有らう。銅鏡も、銅鉞や銅劍と共に多數出土して居る。永康元年作とが建安十年造とか年號の入つた物は支那製の物に相異ないが、古墳時代には日本でも作つた事は確かだ、漢式鏡の周圍に數個の鈴を附けた物等は支那では發見された事がない。其等の物と共に人も入つて、日本人の組成にあづかつた事は争はれない所であらう。出雲民族が朝鮮を通して日本に來た民族である事は多くの人の認めて居る所であるが、南朝鮮と日本との間は人間の出入がかなり自由だつたものらしく、素戔鳴尊なども結局は後に朝鮮に入つて彼地を經營せられたのではないかと思はれる。素戔鳴尊が十握劍をはき、天叢雲の劍を天照大神に奉つた事は金屬使用の時代なりし事を示して居るし、大國主命の國土經營は農業もかなり進んだ時代なりし事を物語つて居るが、その大國主尊をして容易に國土を捧げしめた天孫民族は、もつと優れた、立派な民族だつたからこそ事が容易に成就したのであつたらう。天照大神も、十握劍、九握劍、八握劍を帶き給つたともあるし、八咫鏡を天孫瓊杵尊に賜つたともあるから勿論金屬使用の神様だつた事は明かである。

彦火火出見尊が娶された豊玉姫は、もつと南國的な航海的な民族即ち海族の海神の女といふ事になつて居るが、此の民族も天孫民族に参加した事は争はれず、神武天皇御東征の時に舟行に大いに役立つたのではないかと言はれて居る。これは要するに、日本建國時代に近づくに隨つて、天孫民族が日本の中心勢力になつて他民族を心服させて統合して來た事は確かであるが、其の異民族に對する天孫民族の態度は恵み深いといふか和氣あいといふか、つまり異民族あつかひ、毛嫌ひをせられなかつた有様が拜せられるのであつて、これが日本統一の成就の上に大いにあづかつて力があつた様に思はれる。畏れ多い事であるが、前述の様に彦火火出見尊が海族の豊玉姫を娶して鷓鴣草葺不合尊の御誕生となり、次の尊も海族の玉依姫を妃となして神武天皇の御誕生となり、神武天皇はまた出雲族の事代主神の女、即ち媛蹈鞬五十鈴媛命を皇后となし給うてをられる。下これにならへば、それこそ本格的な民族の和合體が出来るわけであつて、四民一統 皇室の赤子となり、所謂大和民族となつて、異分子と稱すべきものがなくなるわけである。此の點は日本程巧くいつた國は恐らくないと思はれるのであつて、此の成功から見ても天孫民族の精神が如何に人道的なものであつたかと言へると思ふ。しかも風俗文化が雜然としないのでよく同化されたのであるからます／＼中心勢力たりし天孫民族がえらかつたと言はねばならぬのである。



## 歴史時代

原史時代には九州の熊襲、九州や紀伊の土蜘蛛、關東、東北の蝦夷等は未だ異民族、異分子として皇軍に抵抗したりして居たが、後にはその名も聞えない様に大和民族の組織の中に流れ込んだ事は争はれない。其の他に歸化人の血も大和民族中に包含せられた事は、日本書紀から拾つて見ただけでも度々ある。先づ 垂仁天皇の朝には新羅の王子天日槍が歸化して但馬の女と婚し、常世の國に使用して橋を持つて來た田道間守は、その四代の孫である。日槍の從者は近江の陶人となつたとあるし、神功皇后の五年に新羅から連れて來た俘人は桑原、佐原、高宮、忍海四邑の漢人の祖となつたといふし、應神天皇の十四年、百濟王が眞毛津といふ縫工女を買つたが、これ來目衣縫の始祖となつたとあり、十五年には阿直岐史の祖となれる阿直岐歸化し、十六年には王仁が來て書首等の始祖となり、同年弓月君百濟から百廿縣の人夫を率ゐて歸化し、廿年には倭漢直の祖となる阿知使主その子と黨類十七縣を率ゐて歸化し、廿一年、新羅王、船の能き匠者を買ふ。これ猪名部等の祖也。四十一年には阿知使主等吳から工女を胸形大神に奉り、三婦女は津國に來りて吳衣縫、蚊屋衣縫となつたといふ。仁德天皇の三十八年鹿を打つたのがで佐伯部を安藝の渡田に移す。四十三年、百濟の王族酒君鷹甘部カウカヒとなり、雄略天皇の御世にも度々百濟人

が買がせられた様だが、七年、新漢陶部高貴、鞍部堅貴、畫部因斯羅我、錦部定安那錦、譯語卯安那を上桃原、下桃原、眞那原の三所にをらしめたとある。又十一年百濟から吳の貴信(臣)來り、磐原の吳琴彈瓊手屋形鷹等の祖となつたとある。十四年吳の獻れる手末才伎漢織、吳織及衣縫兄綏、弟綏等を檜隈野に安置らしめて、羽鳥衣縫部、伊勢衣縫部の先となつたとある。十五年、秦の民分散し、秦造に委ねないので、天皇秦造酒公をあはれみ、秦民を聚りて秦酒公に賜つたので、公は百八十の□□を領率して庸調絹練を奉つたので、ウヅマサの姓を賜つたとある。十六年漢部を聚めて姓を賜ひて直といふ。仁賢天皇六年日鷹吉士高麗より還りて、工匠須流根、奴流根等を獻る。倭國山邊郡額田邑の熟皮高麗はこれの子孫だとある。欽明天皇十一年百濟から高麗の虜十七人を獻つるとあり、廿六年高麗人投化し、山背國に置り、今の畝原、奈羅、山村の高麗人の先祖なりとあり。崇峻天皇の元年、僧六、寺工二、鑪盤博士、瓦博士三、畫工一を獻る。二十一年には新羅、百濟、漢人等の女子十數名が尼になる。天智天皇の四年、百濟國の歸化百姓男女四百餘人を以て、近江國、神前郡に置き、田を賜ふ。又八年、百濟の歸化人七百餘人を近江國蒲生郡にをらしむ。又大唐郭務儻等二千餘人を遣して來らしむ。十年には百濟の學藝の諸士に官位を興へた。天武天皇十年三韓の諸士に詔して、十年の調税をゆるし、歸化の初年に俱に來ける子孫は課役悉く免すと。十一年には越の蝦夷伊高岐那等、俘人七十戸をもて一郡と爲さ



んと請す。乃ちこれをゆるすと。又倭漢直等に姓を賜ひ連といふ。十三年化來の百濟僧尼及人男俗女併せて二十三人を皆武藏國に安置らしむ。持統天皇元年投化せる高麗人五十六人を常陸國にをらしめ、田を賦ひ稟を受けて生業安らかならしむ。四年歸化する新羅の十二人を武藏國にをらしむといふ様な記事が澤山有つて、歸化人を却々大切にして居るからその子孫も澤山擴がつたに相違ない。其等も皆大和民族に同化して仕舞つたわけだが、廣義にいへば出雲民族も、天孫民族も、肅慎も、百濟、高麗、新羅の人も皆モンゴロイドであるから、言語、風俗が同化すればわからぬ様になるのも無理はない。漢民族も少しは入つて居るであらう。蝦夷といふのはアイヌもあり、肅慎もあるのであらうが、これも巧く消化されたわけである。

天孫民族の巍然たる消化力は、昔も今も雄大で、接するものを皆日本化するから、今更ら血を分離しなくとも、國民優生法的に淨化するのが最良策であらう。

### 人為淘汰と自然淘汰

生存競争と弱肉強食とを混同しては困る

一中學校の先生が、マルサスの人口論の話をしたら、マルクスの話をしたと誤解されて、大問題になつたといふ實話がある。數ヶ月前に廣島のデパートで開かれた時局展覽會にも、ダーキン説は即ち白人が世界を征服するといふ説だといふポスターが有つたのを見て驚いた。私の此の原稿は旅行途中に頼まれて旅行の終りとメ切りとが殆んど同時だと宣告されたのであるから、ダーキン辯護の論文とさへ言へないもので、筆のまに／＼旅中に書いた隨想であるが、先づダーキンの事から書き起すことになつた。ダーキンは所謂秀才型の、負けざらひの擧げ足取り式の人ではなくて、誠にのび／＼と、水の様にならぬといふ様な、無理をしない思想家であつて、其の面影は、八九歳の幼年の頃の逸話によつても覗がはれるのである。その逸話といふのは、やや年長の一友人が、通ひで買ひつけの菓子屋から、金を拂はずに菓子を買つて出て來たのを見て、通ひ制度の事を知らぬダーキンは不思議でたまらず、あまり根ほり葉ほりその友人に聞きたゞすので、友人は人のよいダーキンをからかふ氣になつて、自分の叔父さんは町に澤山金を寄附してあるので、此の目じるしの帽子を被つて行つて、それをかういふ風に廻せば、何んでも唯で買へるのだ。君も一つやつて御覽とけしかけた。ダーキンはそれを眞に受けて、その帽子を借りて菓子を買つた後でその帽をくるつと動かして出て來たら、買ひ逃げの不良少年と誤解されて追ひかけられて泣き出したと自傳に書いてあるのである。が此のねつとりとした鈍重さは成長後の論文



にても同様で、反對説をも悪意にとらずに、叮嚀に扱つて居る點は、讀む吾々にも誠に奥床しく感じられるのである。かういふ人格者であるから、言葉使ひにも随分慎重な注意を拂つて居るのであつて、人爲淘汰に就いても「人を以つて「自然をこね直し」て變化性を生ぜしめたものと言ふのは誤りである。人が鐵の一片を硫酸に落したとしても、嚴密に言へば、鐵の硫酸化物を造り上げたのは人であるとは言へないのであつて、人は唯、硫酸と鐵との化合力を發動し得しめたに過ぎないのである。若し生物が、變化する先天的傾向を有しなかつたならば、人は何をも仕上げ得なかつたに相違ない」が、「併し人は動植物を或る氣候の下から、或る土壤の處から取つて、他の場所に移し、自然状態の下では食物としてをらなかつた食物をも與へる事が出来るのである。』と言つて居る様に、人爲淘汰が家畜や大根に色々な品種を生ぜしめた唯一の原動力と言つて居るのではなくて、人爲的環境の下に起つた變化の中から、人の目的や好みに適するものを選んで、永い淘汰を重ねた結果、色々な品種が生じたといふのである。

かういふ人であるから、生存競争といふ語を用ひるに當つても、嚙んで含める様に言つて居るのであつて、それは生物の繁殖力の盛んである必然の結果として、種子や卵の全部が全部、生育を遂げるわけにはゆかぬ事實を指示して居るのである。魚の卵が魚の食物となる事も生存競争であるが、風に吹き散されて土に落ちる種子は、既にその地を占領して居る植物と生存競争すると

も言へるし、丈の高い草叢の中にとちこめられて日光に不足して枯れる若木は、その草との生存競争に負けたのであるし、根の張り方によつて土中の養分を攝る競争もあるし、早魃に對する抵抗力の競争もあるし、當然環境に應じて適者は榮え、不適者は負ける事になるわけである。意識的な競争だけを意味するのではなくて、無意識でも競争は有るのである。個體の生命を保つ上の競争もあるが、子孫を遺す上に於ての競争もあるわけである。自然的環境の下に於て、適者が榮え、不適者が負ける現象をダーキンは自然淘汰といひ、スペンサーは適者生存と呼んだのであつて、意味は同じであるが、ダーキンは人爲淘汰に比較をとつて居るので自然淘汰と言つたまでである。非常に廣い比喩的な意味の語なのであつて猛獸が他動物を食ふといふ様な、又は人間が競争をするといふ様な場合だけをさすのではないのである。

### 社會生活と競争

クロボトキン一派の相互扶助論も、あまり競争意志を盛んにするな、相互扶助を念とせよといふ倫理的主張としてなら、一理有るのであるが、社會生活を生存競争と對立させて、同種の動物間には生存競争よりも相互扶助の方が普通だとか、生存競争の例は随分探したが見附からなかつたとか言つて居るのは、ダーキンの生存競争の意味を歪曲して、直接の弱肉強食的なものを見做



した誤りである。ダーキンの意味の競争は社會生活をしてを つても、相互扶助をして居る同種間にも時々刻々に有るのであつて、例へば、同じ病院に入つて治療して貰ひつゝも、抵抗力の強い者は生きるし、弱い者は死ぬし、机を並べて相助けつゝ勉強して居る小學生でも、いざ或中學に入るとなると或者は落ちるし或者は入ると似た現象である。止むを得ないのである。團體と團體、又は團體と個人とが競争する際には相互扶助をなす事が、競争上の非常に有力な一武器である事はクロボトキンを待たずとも明かな事で、昔から行つて來た所であるが、此の相互扶助の法は必ずしも倫理的でない場合が多いのは慨歎に堪へない所で、萬物の靈長たる人間としては、もう少し眼界を廣くして、倫理的にし惡智慧を節約して欲しい場合が少くない様に思ふ。前述の入學試験の際などは、先づ比較的神聖な競争であらうが、それでも或小學校では満點を十二人、一點少ないのを三十何名とか作つて、他校より入學率がよかつたとかいふ噂も有つた。一面から見れば相互扶助には相違ないだらうが、國家を一つの全體として考へる立場からいへば、惡智慧を働かし過ぎた惡例であると言はざるを得ない。成績物を出さして比較したら手數は大變だが、もう少し公平にはなるであらう。

大人の團體の競争上の相互扶助はもつと惡らつたものがあるさうである。徒黨を組んで、人をおとしめたり、非を遂げたりする社會も有るさうである。國際間の合縱連衡の現金さなどは古來有

名なものである。スキフトの「小人國に於けるガリバー」等を読むと、相互扶助によつてガリバーの様な巨人をも巧く始末する様が見える様であるが、時勢が變れば、ガリバーの様な群小にそぐはない巨人も出て來るわけであらうが、萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、何れか秋に逢はで果つべき個人の運命と、代々蓄積されて残る人類の悠久なる文化とを思ひ合せれば、一エポックを作れば、以つて瞑すべしであらう。個人は常緑木の葉の様なもので、落ちては子ともいふべき代りの葉が開いて、何時でも青々と繁つて居る事を想像すれば、安心して死ぬる様なものである。子の葉も孫の葉も生を楽しむすがとなる樹幹は、言はば國家の様なもので、國家を失へば葉はより所がなくなる。國家が健全ならば葉はいくらでも芽を吹いて來るのである。

封建時代といふ様な國內分立の時代も昔は方々に有つたが、國家といふ團體は最も安定な適切な團體形式らしいのであつて國際間の事繁き現代に於ては、どうしても強力なる國家の統一が必要で、國內の分立、割據は許されない状態となつて來たのである。團體生活の一進化であるが、我が國では二千六百年の昔に既に國家統一に成功して居るのは、如何に我が皇室が立派な御精神、御威力を持つて居られたかを仰ぐ事が出來て目出度い事である。



天孫民族は九州北方から先づ南進したものらしく、天照大神の御孫、瓊瓊杵尊に至つてはじめて、高千穂峯に、更に進んでは吾田の笠狭の碕に進み、木花開耶姫にみあひまして隼人の祖たる火闌降尊や、又彦火火出見尊やをまうけてをられる。夙に大陸系の文化を傳承して、彌生式土器は勿論、天照大神も既に御鏡を持つてをられるし、彦火火出見尊も釣針を大事にして持つてをられた所を見ると、青銅使用もすでに、神代にはじまつて居たのである。現に北九州の貝墟其他からは、銅鉾、銅劔、銅鍔は澤山出土して居るのみならず、銅鉾の鑄型まで見出されて居るのであるから、九州で神代にすでに銅器の鑄造をやり且、吾國獨特の改良を加へた形の物さへ出来て居たことがわかるのである。所謂出雲系の素戔鳴尊も大陸系の彌生式土器の外に、既に鐵の劔さへ持つてをられ、砂鐵の鑄造もやがて中國所々ではじまつたものなる事は確實な様である。其の外に、彌生式土器と重なつて出土する所では、彌生式土器よりも下層に位置して居る、従つて彌生式土器より古い時代の物と言はれる縄紋式土器が、關東、東北には殊に廣く出土して居るし、鹿兒島や沖繩(荻堂貝墟)からさへ出土して居るので、それを使つた先住民族もつたであらう。縄紋式土器を使用したのは、今日千島や北海道に残つて居るアイヌの祖先であらうといふ説が多いが、アイヌ人といふものは却々本原の指摘し難い人種で、インドネシア系、ひいてはコーカシヤ人種系だといふ人もありて日本には南方から入つて北退して行つたものといふ人もある

が、又樺太や千島のアイヌの犬は北方の樞犬系のものが入つて居る事から見ても、北方人種の血を引いた者と考へる人もある。又古史にエゾとかエミシとかいふのは必ずしもアイヌ人を指すとは限らないらしいのであつて、越とか栖とかの名を冠して居る人名や土地の名はアイヌ系を指すといふ人の外にオロチヨンとかツングースをも指していふのだといふ人も多い。鮮滿東部や沿海州地方から、東北や北陸にオロチヨンやツングース族の入つて来る事は有史時代に入つても、再であつたといふ。素戔鳴尊に退治されたオロチといふのも越のオロチヨン族の頭領の事だといふ人もあるのである。兎に角其等の民族もつたであらうし、又近畿には洞穴生活の土蜘蛛族がをり、西九州には熊襲がをり、瀬戸内海、四國西岸、九州東岸地方には文身黥面の海人族がをり、石見には春日族がをつたといふ風に随分澤山の所謂異民族が割據してをつたわけであるが、それが兎にも角にも神武天皇の御東征を一段落として國家の統一が出来たといふのは、一つには金屬武器の威力にもよるであらうが、一つには確かに罪を悪みて人を悪まず、降る者は助けて生を安んぜしめるといふ八紘一字の立派な御精神の賜であつた様に思はれる。此の寛仁な民族融和の御精神は滿洲事變や支那事變にも輝いて居るが、これは神代以來の日本の皇室の御精神であつたらしいのであつて、異民族や戰敗國人にとつて、こんな有難い國は類例がないのではないかと思はれるのである。例へば彦火火出見尊は海人族の大綿津見神の娘豊玉姫を娶して鷓鴣草葺不合尊



をまうけられ、神武天皇の御母君も豊玉姫尊の御妹玉依姫尊である。更に神武天皇の正妃はおだやかに出雲系の經營せる國土を國讓りをして美保ヶ關に引退せる事代主神の御娘であつた。この融和の御心を拜しては異民族も臣子のなごやかな心になつて心服せざるを得なかつたであらう。唐と交通がはじまつて以來は歸化人といふものが、支那や朝鮮から澤山來たわけであるが、これ又安堵して子孫を遺して日本民族となり、今ではどれがどれやら解らなくなつたし、わかる必要もない程よく消化されて打つて一丸の日本民族となつて居る。安倍貞任はエソ族だつたさうだが、元の總理大臣米内大將はその子孫であるといふ事を新聞で見た。風俗や習慣、言語、精神が異つて、心が二國に分裂して居る間は異民族の結婚には色々不便もあるであらうが、それさへ同化してしまへば、日、鮮、滿、支位の結婚は民族的に大した害はないのではないか。雜婚は子孫に到つて、遺傳形質の分離を來すから不可であると説く人もあるけれども、それは白人と黒人といふ様な大きな差異の場合の事であらう。北方東亞の民族は大體ウラルアルタイ語系の同根の民族であるから、むしろ良質、美質さへ選んだら、混血の方が、子孫の活力を盛んにする效があるだらうと思ふ位である。兎に角日本民族の同化といふものは珍しく巧く成功したものであつて、それもひとへに、皇室の御仁慈、八紘一宇の御精神の賜であると思はれる。斯る有難い皇室を宗家とする日本は、皇室の爲めに盡忠報公の一念に燃え、皇統連綿として天壤と共に不窮である事は

疑ふ人がないのも當然の事である。私も常に思ふ事であるが、文字こそ支那から傳來し、假名もそれからくづして作つたものである事は確かだが、それを以つて、日本本來の文化はなかつたのだ等と言ふ説をなす人のあるのは不可解に堪へないのである。支那の字で書かれながら、古事記や日本書紀に現れた日本建國の由來に、日本精神といふものは柄として輝き渡つて居るではないか。支那の何の書の模倣でもあり得ない事は明かであらう。佛教崇拜の道鏡の時代に於てさへ、彼の和氣清麻呂の一言即ち、吾が國は開闢以來君臣の分既に定まる、臣を以つて君とすること、未だこれ有らざるなりとの一身の利害を捨てての復命は、日本精神の發露でなくて何んであらうか。吉田松陰の「我れ今國の爲めに死す、死すとも君親に背かず」と言つたのも此の精神の發露の一面である。

生物學上に、細胞單位説に對して全體説といふものがある事は嘗つて述べた事があつたが、一個體の生物は細胞の集合體といふよりは、調和統一せられた全體が單位であるといふのである。細胞に對していへば個體が一全體であるが、個體に對しては又統一の程度の色々な團體が一全體となるわけである。國家も一つの全體として統一せられてこそ強味を發揮するのであつて、個人主義に對立するわけである。機械的な全體主義行動は蟻とか蜂とか白蟻とかにかなり著しく見られるのであるが、これは本能的、盲目的のものであつて、白蟻の女王も卵を産まぬ婆さんになる



と飢ゑ死にさして平氣で居るといふ様なものである。獨逸國なども全體主義の標本の様に言はれて居るが、彼等にも王朝の變化や國體の變革は平氣なものであつて、眼中祖國ありて君主がないのである。我が日本ではこれと異つて皇室をはなれて日本國なく、忠君をはなれた愛國はない點が、白蟻や獨逸の全體主義と大いに異なるのである。この點を認識しなければ日本精神とは言はれぬ事、西先生等の力説される通りである。皇軍の比類なき強味は此所に胚胎して居るものと思はれるのである。生存競争上から見てもこれが日本の非常な強味である事勿論である。

### 人爲淘汰と畸形

戦争も生存競争上の一表現であるには相違ない。ニコライ等は前の世界大戦の悲惨が身にしみたる結果、非戦論の闘將となつて、争闘的な人を人の中の狼などといふけれども、狼其他の猛獣でも、同種間では、人間程争闘的ではないので、人中の狼といふが如きは狼を辱しめた話であるとか、好戦國民は文化的には價値の少ない退化的な國民であるとか、今でも原始民族は平和的であるとか、戦争欲は本能の錯誤であるとか、えらく戦争の悪口を言つて居る。成る程、これ程の科學文化を産み得る人間であり、言語の發達して居る人間でありながら、言語で解決が著かぬのは残念な事であるけれども、實際上、人間の道德的水準はそれ程高くなつてをらんのであつて、國

際聯盟の様なものを作つて見ても、權力は力なりで、強國の我田引水論が多くて、言語では解決が著かぬのであるから、一國だけ武備を捨てたら忽ち亡ぼされて仕舞ふのであるから、戦争の起るのも止むを得ないのである。殊に今度の支那事變等は、白人の爲めに亡ぼされるに瀕した支那に活を入れて、東洋平和の建設を眼目として居る戦争で、國土を奪取しやうといふのではなし、支那を亡ぼさうといふのではなし、其の反對なのであるから、日本を隣邦に持つた支那は誠に感謝すべき極みである。唯前に述べた様に、戦争だけが生存競争ではなく、平和の恢復した時にかへつて産業的なり經濟的なり、文化的なりの無意識な競争が絶えずあるのであるから、氣をゆるしては劣敗する事のあるのを心せねばならぬのである。

人爲的淘汰は自然淘汰の様に、生物自身の爲めの進化を目的と考へ得るものではなくて、人の特殊な目的に適する様な物を淘汰（選擇）するのであるから、自然的環境にさらされる事になると、生物にとつては、抵抗力が弱つたり、退化したりで敗退する事がいくらかも有るのである。畸形的な點を人間が賞美して淘汰したりする場合には殊に然りであつて、人間社會にも、さういふ不健全なる所産者が無い事はない様で、環境の變化があると、それに適應しかねる弱者となる運命を免れない様である。知育偏重とか、黄金萬能とかいふのも一つの畸形的淘汰の結果と言ひ得やう。教育上にも自然にかへれといふ聲が昔から時々起るのも一理あると思ふのである。



自然にかへれといふ意味も、色々人によつて異つて居る様であるが、私が茲に言ふのは唯、知、情、意、體育各方面の圓滿なる成長を遂げしめよといふだけの浅い意味であつて、動物の様なれといふのでは勿論ない。時勢の變化に對する人間らしき認識はますます高めるべきであるが、悪智慧を連發させる様な人や、人間味のない人や、意力のないひよ／＼は人間として畸形的な不自然な所産物ではあるまいかといふまでの事である。

## 種の起原

### ダーキンへの誤解

ダーキン説といふのは白人が世界を征服すべしといふ説であるといふポスターを見た事もある。ダーキンの説は弱肉強食を肯定するので勝ちさへすればどんな手段をとつてもよいといふ事になるので資本主義や侵略主義が生れ、その反動として共産主義が起り、それがゆきつまつたから全體主義や皇道主義でなければならぬ事になつたといふ言説も最近讀んだ。かうダーキンが引つぱり出されるのは名譽な事かも知れないが、ダーキンはさぞ迷惑して居るだらうと思はれる。

ダーキンは極めて遠慮深い生物學者に過ぎない。それ以外に何の野心も虚榮をも求めなかつた人である。氏は世界を周遊して生物の所謂種類は一定不變のものではなくて、色々な所謂別種に分化してゆくものであると信ずる様になつた。その原因を考へて居る内に飼育動物や栽培植物に色々な變化が出來たのは趨異の法則と人爲淘汰とによるものなる事に氣付き、自然界の場合には自然淘汰が人爲淘汰の代りの役をするものだとこの信念を委しく述べただけであつて、生存競争といふ事も植物界にも動物界にも免れない事實だといふだけであつて、倫理的に生存競争を奨励したわけでは毛頭ないし、生存競争の武器といふものも實に多種多様な事を明言して居るのであつて、必然的に弱肉強食とか資本主義とかになるなどといふのは大なる誤解である。共存共榮をはかることは生存競争上有力なる武器となる事こそ思ひつくべき筈なのである。全體主義や皇道精神と矛盾するものでない事は私などが皇道精神を奉ずる者なる事によつても明瞭である。さればこそ生物進化論を講義しつゝ一方にキリスト教の講演をする人もあるが別に阿世曲學の苦痛などは感ぜぬ學者が居るのである。元素の循環をとくと同じ事で、倫理學説ではない事に留意しなければならぬのである。之を倫理學説に應用して、あやまつた人は有らうが、善い方に應用すれば全體主義にでも何にでも應用出來る性質の説なのである。現に生物間の聯關生活を説いて今日の全體主義的生態學の進路の開けたのはダーキン説の御蔭だと言つても宜しいのである。武器も進化



する。機械も進化する、學者も進化する。進化しては悪いと言はれては困るであらう。その進化の要因は生物界ではかうだとダーキンは説いただけであつて、これを社會學に應用したのはスペンサーであつてダーキンではない。資本主義、自由主義が全體主義に變つた所でダーキン説は何の痛痒をも感ぜぬのである。進化論を悪いものとしてまつさつする様な事をしないで私はむしろこれを善用してどしどしよい進化を策すべきであらうと思ふのである。次の「種の起原」の紹介も誤解をとくに少しでも役に立てかと思ふだけであつて、全體主義を否定して資本主義にかけられなどといふ氣は毛頭ないのであるから誤解しない様に願ひたいのである。

### 「種の起原」出版の奇縁

チャールス・ダーキンは一八〇九年二月十二日の生れであるから、一八三一年十二月にビーグル號に乗つて世界周航の旅に上つたのは、まあ彼の二十三歳の頃であるが、南米で、極めて近似した種類が南方にゆくに従つて北方の種類を代置して居る事、南米附近の島々の種類が大陸のと近似な事殊にガラパゴス群島内の島々に於ける種類の間差異、又齧齒類や貧齒類の現棲種と化石種との關連等に依つて、生物の種類は變化するものであるとの信念を得たので、歸國後、一八三七年七月に「種の起原」の最初のノートブックを開いた。翌三八年にマルサスの「人口論」を

讀んで淘汰が種の變化の樞石である事を考へ附いたので、一八三九年に「種の起原」の骨子を書き一八四四年にはこれを書き直してフッカーに見せて居る。その第一部は「育成下及自然状態に於ける生物の趨異」となつて居り第二部は「自然状態に於ける生物の趨異、淘汰の自然的方法、育成變種と眞の種との比較」となつて居る。一八五七年十月にアサ・グレイ教授にも同じ考へを述べた手紙を送つてをる。一八五六年にライエルの勧めによつて大規模の「種の起原」を書き始めて五八年に及んでをった時に、六月十八日に突如、ワレースがターネットに居つて書いた「變種が原型から無限に變つてゆく傾向に就いて」といふ論文を送つて来て、若しダーキンが十分新奇な、價値あるものと思ふならばライエルに交附して呉れないかと言つてよこした。ワレースもマルサスの人口論からヒントを得たのだが、此の論文は二月に熱病に罹つて居る中に思ひ浮んで二時間足らずで書き上げたものだといふ事が後にわかつたが、此の論文を讀んだダーキンの驚きは大きかつた。自分が年來考へたり書いたりして居たのとそっくり同じ要旨だつたのである。一時は自分を殺してワレースに創見の榮譽を捧げ様かとも思つたが未練も無きを得ないと言ふ様なわけで、ダーキンの年來の論旨を知つて居る兩親友、フッカーとライエルとに相談した。兩友は熟慮の末、自分達の責任として、一八五八年七月一日のリンネ學會に、上の事情を附記して、ダーキンの一八四四年の論文の第二部とワレースの論文とを同時に發表した。同日の會は副會頭ロ



バート・ブラウンが死んだ爲めに後任選定の爲めの臨時會だったので、若し同氏の死がなかつたら少なくとも四ヶ月はおくれる筈のものだったといふ。併し此の發表の反響は翌年「種の起原」の出版せられた時の反響に比べれば、誠に淋しいものであつた。

「種の起原」は一八六五年に書き始めた方針で進めたら、あの四倍又は五倍の大冊となつたらうのが、ワレースの論文を托されたのが機縁となつて、出版の期を早める爲に摘要だけを發表する形式になり、一八五九年十一月二十四日に出版された。初刷千二百五十五部は即日に出拂ひになつたといふ事である。第二版はあまり改訂がないが、第三、第四、第五版と改訂や追加が加へられ、一八七二年に第六版が出たが、その序文によると、當時既に獨、佛、伊、露、瑞典等に譯されて居た事がわかる。ワレースも本書を讀んでは、材料の豊富といひ、哲學的な考察力といひ、自分には何十年の先覺たる事を認め一八八九年には「ダーキニズム」といふ本を著して、自然淘汰説をダーキン説と命名して居るが、面白い事に「種の起原」の後版は批評や反駁に煩されて自然淘汰を最重要とするダーキンの初志に後退の俤ありとして、その恢復を圖つて居る。

### 「種の起原」の内容

「種の起原」は委しい題名は「自然淘汰即ち生存競争に於ける有利な品種の保存といふ方法によ

りての種の起原」となつてをり、次の目次より成つて居る。

#### 第六版の追加及び改訂

#### 歴史的概観

#### 緒論

第一章 育成下に於ける趨異

第二章 自然界に於ける趨異

第三章 生存競争

第四章 自然淘汰即ち最適者の生存

第五章 趨異の法則

第六章 此の説の難點

第七章 自然淘汰説に對する種々なる異論

第八章 本能

第九章 雜種

第十章 地史的記録の不完全

第十一章 生物の地史的繼承に就いて

第十二章 地理的分布

第十三章 地理的分布(續き)

第十四章 生物の相互類縁、形態學、發生學、痕跡器官



## 第十五章 摘要と結論

目次だけ讀んでもワレースが敬服したのも無理がないと思はれる。序でに私が以下にも趨異といふ語を使ふ事に就て一言さして頂きたい。今日多くの人が變異といふのに私があへて趨異と使ふのは故渡瀨庄三郎博士の傳統であつて、先生は此の語は日本に未だ譯書のなかつた頃の漢譯で使つて居る語であるが、餅屋は餅屋だけに variation の原意をよく表現して居て變異では少し變であると申されたからである。他意あるわけでもプライオリチーを論ずるのでもない。

## 人爲淘汰

第二章は、此の章だけを切り放して見れば最も異論の少ない部分で、今日でも飼ひ鳩の諸品種がカハラバトから由來したとか、家兎の諸品種が野生のラビットから由來したとか又スグリの實に何れ程の品種が出来たかといふ様な事を否定する人はない。そして又其等の育成品種の出来る上に人が無意識的に又は有意的に行ふ所謂人爲淘汰が如何に重要な効果を及ぼしたかを疑ふ人もない。スグリの果實には非常な異ひがありながら、花にはあまり異ひがないといふのは、人が果實に着眼して淘汰したからで人によつて淘汰する好みが違へば色々な方向への育成品種が出来るのである。淘汰が趨異そのものを起させる力があるといふのではないが、起つた趨異の内から目ざ

とく好みにより適するものを見つけて繁殖させるといふだけでも、人爲淘汰の効は偉大なのである。趨異そのものの起る原因となると不明な點も多いが、それでも食物や土壤其他の環境の自然が趨異を起しやすい事はこれ又多くの人の認める所で、育成動植物の進化と人爲淘汰との關係に就いては反對が少ないのである。(岩波文庫「育成動植物の趨異」参照)

論難の多くは、育成動物に變種の出來得る事は確かでも、恐らくその變化は種の域を超えて自然界の所謂他種になる事は出來ない、自然界の進化をこれから類推する事は出來まいといふ點である。ワレースさへも此の點はダーキンの弱點だと言つて居る。がダーキンは本章では生物の變化し得る事を先づ最もわかり易い例で世人の頭に打ち込めば足りるとしたなら成功したと言ひ得るであらう。

## 自然界に於ける趨異

然らば自然界に於ける種とは何であるか變種とは何であるか。何人をも満足させる一定の説といふものは今日でさへないのであるが、種といふと特殊な創造作用を含んだ考へがあり、變種といふと共同な子孫といふ考へが頭に有る時に用ひる様だとして、ダーキンは兩者のギャップを考察しようといふのである。そこで先づ實際になると、種として取り扱ふか變種として取り扱ふか



は人に依つてまち／＼だといふ實例を示して居る。種々な植物學者の作製した英、米、佛の植物誌を比較すると、どれ程多くの植物が或學者には種とせられ或學者には變種とせられて居るかに驚かされる。或屬をバビントンには二五一種に分けて居るのに、ベントムは一、二種にして居る。實に一三九が疑問といふのである。變種を共同なる子孫とすればこれは同種中の趨異となるわけで、それ程自然界にも趨異が多いのであるから、自然淘汰の働きかくべき土臺は自然界にも無いとは言へぬのである。

### 生存競争

生物の生殖率は恐ろしいものである。理論上の計算をダーキンも其後の人もやつて共に驚くべきを示して居るが、實際にも二三年も周囲の事情が好適だと、驚くべき繁殖をする動物や植物の例は幾らも見られて居る。濠洲や南米に移入した家畜の野生化した個體數の驚く程多い事は、若しその報告が確實なものだつた事が知られなかつたら信用されなかつたであらう。その恐るべき生殖率を有する動物が非常に澤山の種類である事を考へれば、生存競争の如何に烈しいかは自明である。自然界の生物の平衡は生存競争の平衡によつて保たれるのである。生存競争と言つても決して直接に噛み殺す様な單純な事だけでないのはわかりきつた事である。ダーキンはちやん

と「予は此の語を一生物の他生物に對する繫倚を籠め又（もつと大切なことには）常に個體の生存のことのみならず子孫を遺す上に於ての成功の事をも籠めた廣義な比喩的な意味に於て用ひるといふことを斷つて置く必要がある」と言つて居るのであつて、荒野の隅の一植物は旱魃に對抗して生存の爲めの鬭争をするとも言はれるし、年々幾千の種子を生ずるが、其の内何分の一のみ成長する植物はもつと本當の意味で、既に地を被へる同種又は他種の植物と鬭ふと言ひ得るのであらう。やどりぎは林檎又は他の數種の樹に寄生するが、一樹に澤山寄生すれば、其樹を害し枯らすからしてその樹とやどりぎと生存競争をするとも言へるが、同一の枝に密生するやどりぎの若芽同士はもつと本當の意味で相互に競争するといひ得る。又やどりぎは鳥に依つて種子を分布するからして、果實を食つて種子を散布する鳥を誘ひ寄せる爲めに他の果樹と鬭ふとも言ひ得ると言つて居る。それなのに心なき植物には生存競争は有り得まい等といふ批評をするのは讀まずして人を誣ひる者である。本章は題は生存競争であるが、一幅の生態畫であつて、生物相互間の關係の如何に複雑微妙であるかを深く考へせしめるものである。又生物と無機自然界との關係をも説いて居る。生存競争上の武器といふものにも實に種々様々なものがあり得る事も直ぐわかるのであつて、クロボトキンの相互扶助といふものも生存競争上の一武器と考へれば面白いものなのに、生存競争と相對立するものの如くに言ふのは誤りである。無意識でも生存競争は有るので、



生活の鎖とか生活の網とかはもつと深く研究の餘地がある。

### 自然淘汰

自然淘汰といふものは上述の生存競争に於て皆が皆生きられない以上は最適者が生存し不適者が亡びるといふ事である。何が適者であるか何が不適者であるかといふ事は環境によつて一概に単純には言へないわけであるが亡びるには亡びる理法があり、榮えるには榮える理法が有るといふのである。人為淘汰の場合は人が目に見える所だけに關係するから、これが趨異に及ぼす影響も皮相に留る(相關趨異にふれずに言へば)傾きがあるが、自然淘汰の場合には運動の速さとか、其他にしても深い所までの形質に關連して居るから其の影響も一層深刻であると言へやう。たとひはじめは小さな趨異でも淘汰を受ける年月は人が淘汰をはじめたよりは永いであらうから、特色の蓄積も大であらうし、一方に不適な中間形は亡ぼされるといふ事もあらうから、共同な子孫でも中間形のない種の差別にもなるであらう。本章でもダーキンは自然淘汰を以つて趨異を誘起するものと想像する人があるが、併しこれは唯或生活状態の下に發生してその生物に有益である様な趨異を保存するといふ意味に過ぎないのだと言つて居る。それで本章に趨異の法則を論じて居る。(雌雄淘汰の事をも本章に述べて居るが、今日種の變化には之は重きをなさぬといふので略す)

### 趨異の法則

自然淘汰が働く爲めには、その土臺となる趨異が先在する事を必要とするのであるが、此の趨異の問題に就いては今日でも大問題なので、ましてダーキンの時代はもつと不完全だつたのであるから、此の點が最も後の學者の批評の的となつた部分なのである。

マデイラの甲蟲五五〇種の内二〇〇種は著しくその翅が退化して飛ぶ事が出来ないのやマデイラに翅の使用を必要とする甲蟲の種々な群族が殆んど全く缺如して居るのは、風の強い爲めに(海にとばされない様に)恐らくは不使用と結び附いた自然淘汰の作用に基づくものと思はれるといふラマークの説明はワイズマンの胚種質説即ち後天形質の遺傳を否定する説に反駁せられ(セモ等の新ラマーク説もあるが)、又ダーキンの力説した輕小な個體趨異が蓄積せられて大となるといふ考へも、その趨異が遺傳する事が證せられないと、減價せられるわけであるが、此の點もヨハンゼン其他の實驗遺傳學者の反駁がある。ダーキンも屢々考へたが結局捨てた、突然の遺傳する大變化の實在は、ド・フリースの待宵草の突然變化説の公刊以來、他にも例が出て來て、これこそ自然淘汰の働く土臺となり得るものだといふ人もある。併し趨異の大小といふ事は人によつて評價が違ふので、ダーキンの考へた趨異が皆遺傳しないといふ事は言ひ得ないと思ふ。永い年



月の間の變化といふ目から見ると、所謂實驗遺傳學も未だ時日が不足するのであつて、趨異や遺傳の研究はもつと深く入らねば本當のダーキンの説の批評にはならぬであらう。中には自然淘汰説は、世人をそれだけで萬事解決の様に思はせて、生物學の進歩を妨げた等いふ人も有るが、それは少なくともダーキンの本志ではなく、遺傳趨異の問題はもつと明かにせねばならぬと言つて居るのである。ダーキンは相關趨異の事やゲーテの成長の補償と節約との説にまで言及はして居るのである。

### 進化の證據

第十章以下は進化の原動力如何にかゝはらず生物の種が不變でなくて變つて來たものであるといふ證據を、化石學、地理分布及び廣義の形態學上から提示したもので、ワレースも前述の「ダーキニズム」(一八八九年)に「ダーキンは生物の進化を承認しなかつた世人に『變形による生物の由來』をばよく承認させた。殘る所は……」と言つて居る様に、進化の證據はダーキン以後にもますます固く積み上げられる一方なので何をか言はんやである。殊に形態學、發生學方面では、エルンスト・ヘツケルをはじめとして長足の進歩を遂げ、植物分類學といふ代りに植物系統學と銘うつた本さへ出る有様で、甚だしきに至つてはもう分類學はやられ盡して、もうやる事がなく

なつたこれからは生態學だといふ人さへ出て來た有様である。分類も未だ／＼やり盡されたとは思はんが、永い間學界は器官の生理に主潮を置いて、生物間の生理は比較的なほざりにされてを つた傾向のある事も確かであるから、生態學者も輩出してダーキンを喜ばして貰ひたい。

何はともあれ「種の起原」は生物學を迷信から解放して安心して眞理を論じ得る一時代を開いた功績は没却すべからざるものである。どの方面に生物學が發展してゆくにせよ、ダーキンの言及して居る部門の如何に廣汎であるかに驚くであらう。忠實だといふのか頭が廣いといふのか、あの當時の人の著として、よくもこんなに材料を盛つたものである。盛り過ぎて單純な人には少しだ／＼しい位である。



第三部 旅の思ひ出



或る年の夏を私はドイツで暮しました。ベルリンの夏は白い服や麥藁帽を用ひる人などは殆んど一人もなく、合ひ服で十分凌げます。それで吾々日本人としては避暑の爲めに旅行に出る必要などはない位ですが、丁度私は思ひがけぬ母の死亡通知を受けまして、仕方のない事とあきらめては見るものの、時々發作の様に世の中が空虚になつた様な気分になつて、何をする張りあひもなくなり、目がくら／＼する様になりがちでしたので、二つ旅行をして見ようと思つたわけでした。北ドイツは平原で景色は平凡ですが、南ドイツから瑞西、(前の)オーストリーにかけては、アルプス山脈を中心とした山岳美、湖水美がありまして眞に壯觀でした。

此の旅行中に私は、植民地から歸る途中のドイツの軍醫と同車して色々話をし合ひましたが、其の軍醫は口を極めて、世界大戦以來歐洲の婦人道德の水準は一層下つて、今日世界中で婦人道德の最高水準は日本である、日本以外にはないと言つてをられました。一概には言はれない事だらうにと、くすぐつたい様な嬉しい様な氣がしました。歐米の婦人にも立派な點も澤山あることは勿論で、例へば、家庭の主婦であり母であると同時に、夫の遊び相手を兼ね、家政婦や女中を

### 或る夏の思ひ出 (日本婦人の評判)



兼ねての仕事を一人でやりこなすといふ様な三人分位の働きを持つ事などは、日本婦人の大いに學ぶべき點だと思ひますが、日本婦人の操守の堅固な、ぐらつかない點は、此の軍醫ばかりでなく、世界の萬人に承認される様にます／＼向上して頂きたいと思ひました。

ベルリンに歸つたら丁度、近年死んだウキリアム・キューネルトといふ、猛獸畫の大家として世界第一の稱ある人の畫の展覽會が開かれて居ました。畫は高價なので買へませんでした。その説明書を読んで見たら、此の畫家は大自然の中に活躍する猛獸の生きたまゝの姿を寫生する爲めにアフリカに單身旅行して居る間に、奥さんは家出して仕舞つたといふ不幸な目にあつたと書いてありました。私は不圖、前の軍醫の話と思ひ出して、日本の男は一年でも二年でも、家庭を奥さんに托して後顧の憂なく國家の爲めに働き得るのは國家の強くなる一因に違ひないと思ひました、が又夫の仕事に必要とあれば、滿洲でもマレイでも何處にでも幸福な清潔な家庭をつくり上げるといふ勇氣を出して下さる事も、日本が大東亞共榮圈の指導者となる上には是非必要であります。

## 春の山路

仙臺の高等學校の生徒であつた私は、春も夏も、休暇になるのを待ちかねて、山路を辿つて山形の父母の家に歸るのを樂しんだ。それは一つには、丁度中間に、どちらからも七里ばかりの所に作並といふ原始的な温泉があつて一泊されるからでもあつた。此の温泉は(其の頃)豪壯な溪流の側に湧き出て、七つ位の露天同様な浴槽に満ちあふれてをって混浴であつた。仙臺を出て暫くの間は木炭を積んだ馬の行列などにもよく出會ふのであつた。

鈴の音からりころりと野にひびき

數へあくほど馬群れて來る。

たまゆらに野みちをゆけば輕々と

帽子をとばす風のよきかな。

その中に歩きつかれて路傍にころがりたくなる。

歌にあき歩くことにもあきたれば

しばしを雲の行方眺むる。

やはらかき草にまるびて眺むれば

空も林もいとめづらしき。

温泉の近くになると溪流も豪壯になる。



路いよよ巫山に入ると旅日記に

書いてみたき溪の流れよ。

雲橋と名づけまほしき木の橋を

渡ればほのに湯のかをりする。

湯の宿は小池とか言ふ昔風の庭の廣い大きい家で、湯に入るには二丁程もだん／＼階子を谿の底まで下りてゆかねばならぬ。方々に枝の様な廊下のあるのは自炊的な湯治客の部屋に通ずるのである。夜などは階子も湯槽もカンテラの燈がうすぼんやりして居るだけである。

カンテラのかげうすくらき谷の湯に

女もあまた歌唄ふかな。

わがゆけばつと湯の中に沈みたる

乙女心をいぢらしと見ぬ。

月おぼる谷の音よき眞夜中に

ニンフの如くひとり湯あみす。

ねむられぬあかつき一人湯にあれば

神代の如き谷のひよきよ。

晝近く湯に入つて居たら女連れの壯年がはいつて来て、元氣のよい話をしてをつたが、突然君の兄貴は今何をして居るかといふ。兄を知つて居るのかときいたらいやちつとも知らんといふ。かういふ勇ましい男もあるかと思ふと、私の足の甲を踏む年増などに出逢ふこともある。

湯上りのよき色したる若人の

肌を包む谷の朝風。

名も知らぬ花ほの白き谷間を

眺めて立てば驚もなく。

此の日頃石の如くに閉ぢし胸

山の出湯に来て少しとく。

此の宿をたつて三里、名にし負う關山の隧道までの間は、人つ子一人にも會はず、鳥の聲だけをたまにきいて林の中の路をゆくのである。所謂一鳥聲有つて山更に閑なりの境地である。

ち／＼と深山の奥に鳴ける鳥

われに似たりと涙ぐみぬる。

人の子の聲はり上げて唱ふをも

知らぬ顔なる春の山々。



關山トンネルは折れ曲つて居ると見えて、中程にゆくとあやめもわかぬ眞の闇である。氣味の悪いことおびたゞしい。意地悪くも昔人殺しのあつた話など想ひ出す。併し無事に此のトンネルを抜ければ遙かに山形の盆地が見下されるし、非常に綺麗な谿谷に沿つて下ることになる。蝶なども飛んで居る。

かたかこの咲きしく原に身をなげて

家路と思ふ方をながむる。

神仙の城の如くに磨きたる

岩間を走る青き眞清水。

碧玉を酒にとかして滾々と

流せるに似ぬ掬はまほしき。

下りつくして人里に来て見れば、やはり人氣がなつかしいと思ふ。

春の日よ風にもすそを亂されて

ゆきなやみたる乙女いちらし。

## 山陰の初旅

毎年初夏になると、出雲のわかめ賣りが、私の言葉をきいて出雲の人だらうと言ふ。廣島の商店でもよく出雲出身と間違へられる事が有るので、一度出雲といふ所を見たいものだと思つてゐたが、丁度山陰道の動物をも研究材料にする事となつたので、先づ同地方の篤學の士に材料蒐集の連絡をつけようと思つて、昨年十一月末に鈴木君を同伴して出發した。先づ長門峽を踏破して萩市に向つたが、この峽は歩き易い事も三段峽以上で婦女子にも好適の勝景であると思つた。メクラグモが所々の崖にへばり着いてゐた。中途の見晴し茶屋に猪の仔を飼つて居たのも山家らしくてよかつた。この茶屋から下流一里ばかりは、峽が一層豪快になつて疲労も忘れる様だつた。

萩市では川畔の宿に泊つたが、夜半に目醒めたら、風がヒュー／＼、雨戸ががた／＼鳴つてゐて如何にも北國の初冬らしい氣分だつたが、朝になつたらけろりとした快晴であつた。致村教授の話にきいてゐた吉田松陰の舊塾を訪ねたが、成る程維新の昔を偲ばしめて襟を正さしめられた。浮彫りの松陰先生木像を買つたら「親思ふ心にまさる親ごゝろ、今日のおとづれ何ときく



らん」といふ歌が書いてあつたが、斬罪に處せられる日の辭世であるといふ。天然記念物なる明神池の海魚も面白かつたが、それ以上に驚いたのは田中博物館である。之は萩中學の博物の先生田中市郎氏の獨力經營する海産動物の陳列所である。館が小さいのに大物が多いので、住宅の玄關にまで七尺あまりのウミヘビ（魚の）やら杖より長いエヒの尾やらがごたく／＼してゐる。貞淑な日本婦人なればこそ家庭圓滿に過してゆけるのであらうと感心した。私としては山の幸を求めて海の幸に逢會したわけであるけれども、巨大なイトマキエヒの恐るべき舌や顎も初めて見参したし、日本海の怪魚、奇魚を澤山見る事を得て、日本海のローマンスを冥想していゝ氣持になつた。開館記念の繪葉書の一枚に田中さんは「寄蜉蝣于天地、知足海之神秘」と題してゐられた。樂その中に在りと晏如としてゐられるわけであらうが、郷土博物館の一種としても有意義な必要な事業であるから、縣當局や、心有り金の有る人士は、須らく後援して上げて頂きたい。

石見の濱田には同學の山田君がゐる。有福温泉に同道してくれて山海の話を書いた。此の温泉は山間の閑靜な上品な處で、道後の様に共同浴場一ヶ所になつてゐるが、家族風呂が一室有るのが悦しかつた。出雲に入つたら沿線の眺望が廣くなつて、平野つらなり、氣分がゆつたりして來た。車窓から見える植物に南方的なものがあるのを見て氣候は東北の様に寒くない事を思はしめた。今市では同學の土山本君が、野兎三匹を獲つて置いてくれたのが有難かつた。名にし負ふ出雲

大社にも生れてはじめて參詣したが、懐古の情の油然として湧くものがあつた。經營した國土を皇孫に奉つたとは言へ、御孫姫の尊は、神武天皇の皇后として榮え、萬人には崇敬され芳名を千載に垂れて神しづまりなされてゐるのだから、悲惨な様な氣は少しもせず、にこ／＼した大黒顔が目に見えて來る。社殿も杉並木も流石に神さびたものであつた。青瑠璃の産地、玉造の温泉は宿が綺麗で設備もよく、クーパー泊りは氣の毒な位であつた。ある宿には温泉の池まであり、山本、永見兩君の話によると以前はその池中にお膳を浮かして酒もりも出來たといふ事であつたが、時局後はそんな真似をする人もなくなつたといふ。松江はさすがに廣い町で、大橋も安道湖もお城も悠然たるものである。小泉八雲の舊居の案内人は旅中で見た第二の美人であつたが、八雲の書齋の前の小池に蛇が出て蛙を食ふので、八雲先生蛙を可哀相に思つて、肉を蛇に投げ與へて蛙の身代りにしたといふ話が心に残つた。關の五本松の所在地美保關は遙かに北方の僻趣の海岸で、事代主神が、爲政の邪魔にならぬ様に隱退生活をした所ださうだ。その神社にも參詣した。今は誠に淋れた町であるが、却つて私には氣に入り、研究の旅でなかつたら、二三日滞在して日本海の荒浪を眺めたい情緒を誘つたが、大山を目標の旅なので、心を残して弓ヶ濱に渡り皆生温泉に泊つた。荒浪の音が夜中枕になり響いてゐた。

翌日は大山に登つて山のヒュッテに泊つた。國立公園だけの事はある雄大な眺望で、神代の大



國主尊や事代主尊が若し登つたものとすれば、さぞや美しい國土と眺めまはしてほゝゑまれた事であらうと偲ばれた。大山には十二月の末に、尾道中學の岡田、掛江、土生の三銃士が獵犬まで連れて同道し、私のために兎狩りをして下され、案外の收穫もあり、珍談百出の旅をしたが、それは割愛する。唯大山の中腹以上では主として冬には白い兎が獲れるのに中腹近い榊水原で私共は二頭の全く白化してゐない兎を獲つた。犬に追はれると三回までは同じ元の隠れがに歸つて來るが後は遠方にゆくといふのも本當であつた。これは、中腹を境として氣温や雪量が急に變つてゐるわけでもないのだから、兎の白化するしないは、さういふ環境の直接影響だけできまる程原因が浅いものではなく、遺傳系統の違ひによるものだといふ考へを強くしたといふ事だけを申し述べて置く。ホリスターは立山でも十二月に白化してゐない兎を見て居るが、立山といつても大山と同じ様に廣いので、恐らく大山の場合と同じ様な事情であらうと思はれる。現に大山では夏には雉も鶴もゐるが、冬には雉は麓の方に去つて山中には鶴だけが残るといふ(鶴が鳴くとか鳴かぬとか議論があつた)様に、遺傳系統が異ふために棲處を異にするといふ事もあるのである。

山を降りて白兔神社の有る近くの濱村温泉に泊つた。この温泉場は砂丘にさへぎられて眺望はよくないけれども湯の豊富な事は大したもので、普通民家にも引いてゐる位ださうだが、私共の宿でも、舟を浮べた温泉プールも有れば、小さな家族風呂も五つもあつた。博物學出身の文學士

野木村君と色々打ち合せをした。白兔神社の神話の因幡の素兎が渡つて來た島といふのは、有名な隱岐ではなくて、この海岸近くに別の小さな、沖の島といふのがあるといふ話もきいた。出雲では小さな鮫でも皆ワニといふといふ話も面白かつた。

鳥取驛に降りたら、驛前に「松葉蟹」の指標を立てた店が數軒有つた。山陰の宿屋では何處でもよく食はす美しい脚の蟹である。之はツワイガニの事で、雄は體も大きく肢も長大扁平で、食べよいので有名な蟹だが、雌はぐつと小さくて肢も長くなく、まるで別種の様である。併し體内の肉は雌の方が充滿してゐて美味なので、土地の人は雌を惣菜とし、雄は客用、送り出し用にするといふ。なる程雄は一疋一圓以上もするのに雌は十錢位であつた。鳥取市には生駒さんといふ篤學の士がつて天然記念物調査委員でもあり、大山にも百回位登山してゐるので色々大山の話を書きいて有益であつた。

### 科學の門に入る國民

ドイツが歐洲大戦争に勝ち進んで、正に歐洲の中心勢力たらんとして來た事は、苦節十數年、科學の粹を集めて兵器を鍊つたり、國內生活を研究した事にも因ると思ふが、戦争には此の前の



歐洲大戦にも大體に於てドイツが勝つてをつたのに、國內から崩壊したのであつたから、民族の淨化を強行し、異分子を掃蕩して萬民一體となつて、ドイツ精神に統一した事も今回の大きな勝因であらうと思はれる。

私の實見したドイツは十數年前のことであるし、それも九牛の一毛を見たに過ぎないが、それでもドイツ國民の民族性に觸れたと思つた事が幾度もあつた。夫君ジークフリードを騙し撃ちにした敵に對する、クリムヒルドの、きつと口を結んで、復仇の誓ひを立てる沈黙の決心と、着着としてそれを不言實行して行つたあの力こそ、ドイツ民族のシンボルであると思はれる。ベルリンの下宿の主婦(と言つても所謂フロウ・ドクトルで即ちドクトル未亡人であつたが)さへ、ドイツ魂といふ事をよく口にして、大和魂は米から生れると言ふがドイツ魂はジャガイモから生れると笑談を付け加へたりした。ユダヤ人を悪む事は非常なもので、ユダヤ人は注意して見ると口が耳まで裂けて居るとか、まるで悪魔の様にさへ言つてをつた。ユダヤ人排斥、民族の淨化を、ヒットラーの創見の様に言ふ人もあるけれども、此の思想は下宿の主婦にまでしみ渡つてをつたのであつて、恐らくドイツ民族の底にまで普及してをつた思想であつたのをヒットラーが實行した爲めに人氣を博したといふ順序では無かつたかと思はれる。當時のキーンのドイツ民族でさへ眼中ドイツ民族ありて塊國なく、獨塊合併を希望してをつた。シュニーバートの百年祭に十數萬の

ドイツ民族歌手がキーンに集つたのなども、一種の民族運動の現れだと見る人もあつたのである。塊國にはユダヤ人が多過ぎるといふ風であつた。民族のこの團結心、負けず魂、復仇心が科學の推進力ともなつて今日の歐洲の新情勢を持ち來たしたのではないであらうか。ドイツ人は言葉はごち／＼して人ざはりは良くないが、個人道徳としても合理的で、親切で、信頼し得るたりの人が多かつた様に思はれた。例へば私がドイツに入國して間もなく東西もよくわからぬ頃に、一人でミュンヘンに行つた事があつたが、一かどの金持のつもりで停車場に着くなり、タクシーを備つて、ホテル・フイヤーワルテルといふ大旅館(實は旅行案内で見つたんだが)に行けと言つた。豫約してあるかといふから、此奴何處かの旅館と結託のある朦朧車夫かも知れぬといふ氣が出たので、豫約はしてないが行けと言つた。博覽會があつて人が立て込んで居るので駄目かも知れぬと言ひつゝ運轉して行つたが、果してことはられた。他に心あたりはないのかといふから、停車場の旅館係に相談するから驛に車をかへせと言つたら、暫く黙つた後に自分が案内するといふので愈々朦朧ぢやないかと思つたので、いや驛にゆけと言つたが言葉もよく通じなかつたのかも知れぬが、勝手に車を走らしてマキシミリン街の小ぎたない宿に連れて行つて四階か五階かに連れ込んだ。今夜あたり變な目に逢ふのではないかと内心薄氣味悪かつたが、實は私の廣島で買つた既製品の綿入りのきたない外套などから察して留學生と見當をつけて手頃な宿を見



つけて呉れたものらしく、宿の主婦も却々親切で値も安く、御蔭で、大旅館の一泊位の金で一週間も暮せてゆつくり見學が出来たといふ様な事もあつた。日本の留學生が信用を博して置いて呉れた結果かも知れぬが、驛の運轉手でさへ、これ位人間が堅實に出来て居る位だから、ドイツの旅はまあ安全だと思つたが、實際ドイツの何處を旅行しても、誤間化されたり、おびやかされたりする様な事はなかつた。つまり民族性と國民教養の普及との結合の結果、正義心が下々まで發達して居ると見えたのである。床屋でも馬丁でも、堂々と學問を論じて居る程、知育も普及して居るといふ話もきいたが、愛嬌やセンチメントはなくても、合理的で強くて正しく生きるといふのがドイツ教育の主眼であつたらしい(ナチス以後は勿論更に加はつたものがある筈だが)。

由來一面に於ては日本人とドイツ人とは合致する點が有るらしいのであつて、すれて居らぬといふのか、素朴だといふのか、純真だといふのか、徳性があるといふのか、兎に角日本人と結婚せる西洋婦人で、一番永くつきして家庭が圓滿にゆくのはドイツ人だといふ評判は不當でないらしい。今はなき長井長義博士は明治四年にドイツ婦人と結婚したが、それでも先頭ではなくて、第四番目だつたさうだと話してをられた。其後も澤山此の種の結婚は見聞して居るが、どうも日本人を金のある野蠻人だ位に思つて結婚するといふのではないらしく、誠心誠意、夫を尊敬し愛して居るらしい例が澤山有るのである。この「うぶ」な素朴な誠心がとりもなほさず、自然をも

あるがまゝに見つめ得る長所であつて、ドイツ科學の發展の基本となるものではないかと思ふ。科學は自然を(人の心も自然の一種である事は論を要しない)あるがまゝに觀察する事から生れるのであつて、外交辭令や口さきばかりで出来るものではない。誠心誠意自然と取り組み合つて、深く喰ひ入つてこそ、はじめて法則をまで握ることが出来るのであつて、キリストは汝等赤子の心にならざれば天國に入る事を得ずと言つたが、赤子の様に純真な心にならねば科學の門に入る事を得ずとも言へる様に思ふ。ドイツ人はこの素朴な誠意と根氣とを持つた國民であるが故に科學の門に入るに適したのであり、今日の成果を見得たのであらう。

日本人も其の點では、科學の門に入るべき資格のある民族だと思ふのである。人やゝもすれば、日本の今日の科學は全く西洋に負うもので、日本人には科學的能力がないといふ事も言ふけれども、併し西洋科學は日本だけが接觸し得たのではなくて、誰れにでも公開されて居たのであるから、支那でもフィリピンでも印度でもシヤムでも何處の國でも攝取し得べき筈であるのに、ひとり日本に於てのみ急速の進歩をして、今や「日本の科學」の旗を押し立てやうといふまでになつたのは、何と言つても日本人にそれだけの理解力が有り、推理力があり、改良を加へるの能がある事を證するものであつて、唯その建設の材料に觸れる事が遅かつたといふだけであらう。西洋の科學だつて、エヂプト、アラビヤ、ギリシヤの時代からの材料を一步々と積み上げて行つ



てこそ今日の華が開いたのである。自國だけで出来たものではないのである。

日本でも時日の問題で、今からでもおそいといふ事はないのであるが、それには國民の科學教育から着眼して行く必要が有る様に思はれる。先づ戦争の時の事だけを考へて見ても、日本人は、天皇陛下のため、國の爲めには死を賭して進むといふ氣魄に於ては世界に冠絶して居るから、これに加ふるに機械化部隊の行使に熟練したならば、鬼に金棒で、世界無敵の兵隊になるであらうと思ふが、兵隊になる大部分の人は國民教育を受けて入るだけの様なわけであるから、幼時から科學的精神を養ふ事が急務であると信ずる。單に機械の操縦法の一通りだけならば入隊後の時日でも習得出来るであらうが、機械にも突發故障の起る事も有らうし、其他戦場の忙しい中には食物やら毒藥やら火藥やら色々な物の置き所が混亂する事もあらうし、色々な思ひ掛けぬ混雜が起る事があらうと思ふが、さういふあらゆる場合の處置を、一々教へ込むといふ事はとても入隊後の短時間に訓練する事が出来るものではないのであるから、事に當つて、合理的に色々工夫して、科學的に處理するといふ科學的な心構へは、どうしても平素から徹底的に鍊成して置かなければ、いざといふ時に間に合はぬであらう。今後は戦争があれば、ますます科學的戦争になるであらう。内にしては國內總力戦になり外にしては機械化部隊戦となるであらうから、此の點だけから見ても國民の科學的教養の水準を一層高くする必要が急務であらうと思ふ。まして科學の力

で國富み、武装成りて、外國に恐れられて平和を維持する事が出来るなら、なほ更ら結構な事であるから、どつちにしても科學的鍛鍊が必要である。そして科學は科學的精神即ち合理創造の精神から生れるものであるから若い國民の教育に改良を加へる必要があるし、又家庭に於てもつと日常生活を合理化して兒童に範を示さねばならない。科學と日常生活とを結びつけるとはかういふ意味であつて、科學を應用科學化するといふ事は少し意味が違ふべきである。純正科學を放り出すといふ事であつてはならない。

次に國內新體制に處する科學者の任務の事であるが、ドイツでさへ、民族的異分子をこなし兼ねた位であるから、全世界の人間が一團となり、一單位となるといふ事は望めない事である。國と國とに分れて共存共榮を計る様になつたのは、自然の傾向と永い歴史的現象とから生じたことで、まあ之を土臺として考へを立てなければならぬのであるから、國と國とが對立する以上は國として強くならなければならず、強くなるには國內がよく統一せられて内から割れる様な事なしに一體として敏活に國際關係に對應しなければならぬのである。丁度生物體の億兆の細胞と生物個體との關係と同じ事で、外から見ると細胞の集りなどといふ事は氣がつかぬ程であるが、かくてこそはじめて、生物體内の各細胞の生活も安全なるを得るのである。殊に我が日本國は上



に萬世一系の 天皇が太陽の様に輝き渡つて、臣民を赤子の如くにみそなほし、統一の中心が炳として明かなる、世界無比の國であるから、世界無比の統一國家たらしめねば、 天皇陛下に對し奉りても相濟まぬ次第である。國內新體制といふのはかゝる國內統一の強化を目ざすものであるから、科學者としても皇國臣民たるの自覺を一層強くして、科學報國を念とせねばならない事勿論である。

日本人たるの自覺を深める事、即ち吾々は人間であるには相違ないが、具體的には日本人たること以外にはないのであるいふ自覺は、科學研究力にもはりあひが強くなつて、目標がはつきりして良い事であるが、又科學を進歩せしめる方針に就いても反省せしめられる所があると思ふのである。

何國の科學と雖も、其の國だけの所産物ではなく、世界共通の知識を利用しつゝ、一步々々と積み上げて來たものであるけれども、それは西洋の科學を鵜呑みにしなければならぬといふ必要はないのであつて、民族性に應じ、國狀に應じて、夫々材料を取捨選擇して特色の有るべき事は當然である。

反省すべき一つの點として、自然科學と精神科學といふ様な對立のさせ方も不合理な様に思はれる。第一に生理現象が自然であるのに、心理現象が自然でないと云ふ事は言へない。動物が自

然物であつて、人間が自然物でないといふ事はないので、心理にしても、動物心理は自然で、人間心理は自然でないとは言へない事であるが、動物心理を比較觀察してゆくと、生理とつながる所にゆきつくのであるから、心理學を自然科學と對立させるのは不合理であるし、教育學とか倫理學とかも人間の心理の觀察と密接な關係のものであるから、その點からしては自然科學と對立すべき性質のものとは言へないであらう。唯所謂自然科學は實驗に訴へ、引いて實證し易いので科學の定義によく當てはまるに近いといふ事は出来る。換言すれば、科學としては模範的といふか、本型的といふかまあ權威のある科學といはざるを得ないものであるから、今後の哲學や宗教も、所謂自然科學の進歩を顧慮せずしては、人心をつなぎ難い事は確であらう。併し科學とは所謂自然科學だけでない事は明である。科學者といふと唯物論者の様に考へ、引いてマルクス主義を科學の所産物の様に考へたのは科學が悪いのではなくて、西洋科學者の内の悪い傾向の人が悪かつたのである。第二に、更に考へて見ると、自然現象と言つても客體が無くては認識し得ない事は勿論であるけれども、又吾々の心を離れては認識は成り立たないのであつて、自然が吾々の心に包容されてはじめて理性的認識即ち科學が成り立つのである。そしてその自然を包容するといふ吾々が、一方から見れば自然物の一部に過ぎないのであるから、東洋思想の所謂物心一如であつて、物と心とは二つの對立するものではなく、渾然たる大自然の働きとして、互に抱容し合



ふものと見做せば、物もなく小我の心もなく、無私な「實證」といふ働きだけが現實である事になる。此の働きが橋田文相の所謂「行」であつて、科學者は科學の行者である。科學する事によつて、小我を捨てた無私則天の人物となれるといふ論になる。橋田文相は生理學者であると同時に、道元禪師の正法眼藏の註釋を世に出す程の禪學の大家であるので、言ひまはしが、却々むづかしいが、教學の刷新を新體制の一つの目標とし、教は學を内容としたものでなければならず、學はまた教の基礎たるものでなければならぬとか、科學の振興に於ては、それがやがて教學刷新である如き心構へが出来なければ、眞の日本科學は振興出来ないとか言はれるのは、畢竟上述の様な立場から言ふのであつて、此の見地から今日の科學者を眺めると、舊來歐米文化の輸入に急だつた爲めに、科學者があまりに専門だけに立ち籠り過ぎて、眼界が狭きに失し、専門ともつと大きな世界との關係を忘れがちだつたから、自己の専門學術を中心とする事は當然だが、もし學門的に廣い立場を持つてといふ意味なのであると思はれる。日本科學を主張されても、徳川時代以前の科學に歸れといふ意味でない事は明である。一般論としては正に反省すべき大切な事と思ふのである。併し一方には劍禪とか劍聖とかいふ様に、一藝に深入りする事によつて、廣き悟りを開く人もある様なゆき方の科學者も有つても捨て難いと思ふ。廣い所から狭く深く入るか、狭い所から廣い所に出るか、結局は同じ所にゆきつくといふ事も有るから、程度の問題であらう。

一番大切なのは科學者も日本人たる以外に人間としての立場はない事を自覺して、一致連絡を保つて、科學報國の誠を盡すといふ事であらう。

### 淋しかつた正月

「旅に病んで夢は荒野を駆けめぐる」といふのは、たしか蕉翁の句だつたと思ふが、私もロンドンでこれに類した實感を正月に味つた経験がある。

北方の候鳥が南に渡りはじめる動機は、冬が近づくにつれて北方ほど日が短くなつて、あまり早く暗くなるのが鳥を不安にするのだらうといふ説をなす人も有るほど、それほど北歐の冬は日が短い。併しウーランなどでは、いくら雪が多くても寒くても、あまりじめ／＼はしないし、室内に入るとなればオペラでもコンサートでも吾々の手の届くものであつたし、カフェーでもレストウランでも吾々と對等の人間が集つて居る様な氣がして冬の淋しさといふものはあまり感じなかつた。風光明媚なパード・イッシュニールの雪に響かした馬橋の鈴の音もなつかしい。

所がロンドンとくると、もぐらもちの様にチェープ（地下鐵）で往復して居ればそれほどにも感じないけれども、一旦地上に出てバスなどで通つて見ると目的地につくのがもどかしいほど廣



大なもので、博物館の研究室に大半を暮して居る吾々が、餘暇に覗き得る所はロンドンのほんの皮相だけであつて、ロンドン人の生活の核心といふ様なものは、奥深くかくれて居るのだらうといふ様な気がして心淋しいものがあつた。キウガーデンとか、ハンプトンコート・パレスとか、ウインゾル城とか、美術館とか、古本屋とか百貨店とかは、勿論吾々をも平等に慰めてくれるけれども、他の方面になると何處に何があるやら殆んど耳目にふれなかつた。銀行のシルクハットの小使さんや乞食の多かつた事などが印象に残つて居る所をもつてロンドンを律すべきでない事は勿論だが、つまり中流以上の人は大陸ほど吾々のゆくレストウラン等に出入しない習慣な爲めに吾々の仲間といふ様な親しみを感ぜ得ないで淋しかつたのだらうと思はれる。下宿に歸れば日田さん、横山さん、湯淺さん、佐藤さん等といふ大學者と夕食の時に語り合ふのが楽しみであつたが、その夕食がきまつた様に固いローストビーフ専門なものには鍊へられたものである。やつと日曜の夕食を青木さん、恵利さんと共にする事にして息をついたが、大陸よりは物價が高いといふのか料理がまづいといふのかどうも腹の蟲が納まらないこともあつた。ウイスキーだけはたしかに英國が一番うまかつた。

青木さんの紹介で通つた天然博物館の研究室だけは實に氣持ちよい程の待遇で、標本は自由にいちらせてくれるし、文獻なども論文名を書いて出せば立ち處に書記が持つて來てくれて、分類

の論文なら殆んど不自由しなかつた。たゞ季節が悪いので、三時頃にはそろ／＼電燈が必要な位にうす暗くなるので、出ないわけにもゆかず、宿に歸つても仕様がなから散歩でもしやうと思つて、バスに乗つても、例のロンドン・フォッグが襲來しがちで、之に遭つたらもう一間先も見えなくなつて、まるで地獄をでも這ひまはる様な氣持になる。英國はヒースの花咲く頃が一番よいといふことをきいて居ながら、悪い季節に來た私が悪いのでロンドンが年中悪いわけではないのだが、兎に角毎日どんよりしたしめつた様な天氣でいやだ／＼と思つて居たのがたゞつたかして、米國ゆきの切符を買つた正月早々熱を出してしまつた。早速英人の醫者に診て貰つたら熱が百何度とか有るといふ。華氏で體温を読むのはめんくらつたが（反獨逸見識だといふ人もあつたが、どちらが先なのか知らぬ）、攝氏に換算すると三十八度いくらにきりならぬ勘定だつたし、宿の主婦も何よりの風薬だからと言つてウイスキーを飲ませる位だつたから、大した事ぢやあるまいと安心して居たが、三、四日たつても苦しいし、不圖用便に起き上つたら、部屋がくる／＼と廻つたのではつとした。餘程熱が高くなければこんな事はない筈だと思つたら、さあ心配になり出した。悪性流感のはやる頃で新聞は毎日澤山死ぬ様に書いてをつたのを見て居た頃なのでさしては流感か肺炎かと思つたら夢は荒野どころか三千世界を駆けめぐるといふ様な心細い次第となつた。一つにはテートギャラリーなどでブレイクのダンテの神曲の地獄篇の畫などを再々見たせい



もあつたらうが、實に色々な夢を見たものであつた。生物學者のつもりだから來世の生活などを信ずる念は毛頭ないし、死んだら困るといふ様な情熱は何もないのだけれども何か物足りない様に心細かつた。人に迷惑がられて死ぬのが物足りないといふ氣持だつたかも知れない。幸に一週間で熱も下り、けろりとしたが、やはり四十度位の熱だつたのださうで肺炎になる心配があつたのだといふ。はじめは知らなかつたので安心して居ただけ得をした様なものである。さてなほつて新聞など讀むと、行くべきあてのニューヨークは流感で毎日死亡幾らとかいふ記事が目につく。まるで流感に包圍された様で、あれほど日本を遠いと思つた事もなかつた。

### 言葉と筆

先月の或雑誌に、北樺太の石油會社の社員で、永くソ聯の牢獄に擒はれた人の談話として、軒端に雀が來て鳴いてくれる時が一番心が慰められたとあつたのを讀んで涙がこぼれた。實際私なども、西洋の公園等に雀の遊んで居るのを見て、故郷と同じ世界に生きて居るのだと感じて慰められた事が幾度もあつた。不思議なことに、歐洲で「家雀」と言ふのは日本の葭原雀の方で、日本で家の近所に多い雀(頬に黒い點のある雀)は、西洋では「山の雀」と呼ばれて居る。これも

東西あべこべの一例で妙な事である。

廣島の私の家は、ミソゴキが夫婦で巢の候補地にして來る程、草深いからかも知れぬが、晴日には毎朝雀の聲が目がさめる。床の中で雀の元氣よい聲をききながら今日一日の事を考へる氣持も亦よきものである。が近年氣が附いて見ると、雀の鳴き出す時刻が、季節によつて、随分ちがつて居る。夏には五時少し前から鳴き出すし、冬には七時頃に鳴き出す。その間の季節には又その中間で、かなりよく、夜明けの時刻と關連する様である。私が茲に雀の話を持ち出したのは、少年の頃から妙に氣がついてをつた事であるが、雀の求愛の時の音聲が、大分普通の時のと異ふことで、つまり雀にも、多少鳴き聲を使ひ分けて、意志表示をやりわけるといふ事を言ひたかつたのである。さかりのついた猫の鳴き聲が所謂猫なで聲と異ふ事は申すまでもない事で、犬や猫を飼ひ馴れた人は、鳴き方でも、彼等の欲する所がかなり察せられると言つて居る。つまり動物にも多少の言葉はあるといへる様である。

併し、綴られた複雑な言葉を所有するのは人間の特色で、これで細かな意志を他人に傳へる事が、どれほど人類文化の發展に貢献したかは、測り知り難い程である。火を用ひ出した事が人類文化發展の樞石だつたと言はれるのも、尤な事ではあるが、明かに火を用ひた證據の有るネアンダータール原人(第四氷期の頃、石器でいへばマウステル型の石器の頃)も、文化は誠に低級な



まゝで亡びてしまつたが、彼等は脳の形と頤の無い事から考へると、言葉は發達して居なかつたらうと言はれて居る。脳の形と言葉との關係を言はれるのは、聲帯や舌の運動の中樞、即ち言語中樞が大脳皮質の正中溝の前下端近くに在る事から言はれるのであるが、頤と言葉との關係を言はれるのは、頤は舌骨の運動にたゞさはる頸二腹筋の前腹（頤舌骨筋）の附着點である所からであらう。さういへば、ネアンダータール原人以前の、洪積期人類と言はれるハイデルベルヒ原人とか、ピルトダウン原人とか、北京原人とか、直立無言猿人（ピテカントロプス）等には皆、類人猿類と同様に頤といふ突起がない。現人類には頤が皆あるので、御えらい方は人を頤使用する等と言はれるのも一理あるかも知れない。

言葉といふものは、かく貴い特技であつて、言葉一つで、思ふまゝに人が動いてくれるとなると、愉快な事には相違なく、その愉快が嵩じると言葉を遊戯の道具として悦しがるといふ事も無理もない事かも知れない。併し武器も悪用すれば凶器となる譬への通り、言葉を凶器に悪用する事があまり多くなりすぎて居はしないだらうか。井戸端會議といふものは、婦人の特長の様に言はれるけれども、實は却つて、堂々たる男子の間に悪用の例は多くはないであらうか。劇薬の様に、自分には効果が大きい様に、人には毒になる様にといふのであつては、言語も少し邪道にゆきすぎた感がある。

扱て筆であるが、エジプトの象形文字は西暦紀元前四千五百年頃に既に有つたとか、エジプトの象形文字は支那の象形文字と違つて、音符を表象して居るものなので、簡略されてヒエロティックな文字となつたものから、フェニシア人は二十二のアルファベットを作り、それがギリシヤに傳つて、歐洲語のアルファベットの根源となつたといふ様な事は閑話休題として結論に入るが、とかく文士以外の方が、本職以外の事に筆を取ると、本職をおろそかにして居る様な宣傳にかゝり易い様である。森軍醫總監（鷗外漁史）なども、それをこぼしてをられたのを讀んだ記憶があるが、私に言はせると、文章の一つや二つは、人の悪口を言ふ代りの暇に出来るものであつて、敢へて本職を蠶食するのではない。猥談をやつたり、もつと性質の悪い話につぶす時間と比較すればよい方である。少なくとも、署名して筆を取る時には、井戸端會議の時よりも、餘程心が繁張して、堂々とした心持になつて居るのであるから精神修養にもなる。

原稿料が入ると言ふ様な事を連想して、かれこれ言ふのかも知れないけれども、其の點も、公明正大な印税といふものを收めるので、反つて講演とか講習とかいふ方がむしろ、脱税して知らぬ顔をして居る傾向ではないか。どちらから見ても筆をとる事は正々堂々として居るので、私はむしろ、もう少し無駄話の代りに筆を握る事をすゝめたい位に思つて居るのだが、それも勿論程度の問題ではある。



## 學而不思則罔

堅い田舎の人などは話を聞いたり、書物で讀んだりしただけでは納得し得ないものとして、實地に見なければ信用しないといふ風があります。百聞は一見にしかずといふわけです。近代の人はさうばかり言つてをられなくなつたので、聞いたり讀んだりした材料を餘程重んずる様になりました。それも二通りの人々がある様です。社交好きの人はたはいもない話をして楽しみながら、見て来た様な話を聞いたり聞かせたりして、此の話は本當だらうとか嘘だらうとかいふ風に傳へ擴げてゆく。話上手の人の話は愉快でもあるしもつともらしくも聞えるので、社交界の女の知識等は此の種の耳學問が多い様ですが、話は人から人に傳つてゆく間に主觀が入つて變つて來る傾向があるので百聞は一見にしかずといふ事にもなるのでせう。所がたはいもない社交のきらひな人もあつて、社交の代りに讀書して時間を過すといふ人もあります。讀書に熱中する人はますます話術など下手になつて、女には書物の表紙の様な面白くない人などと言はれますが、書物の中で、靜かに著者と交際するのが何とも言へぬ楽しみなのでせう。私等も後者に屬する一人の様で、讀む書物の無い一日は淋しくて困りますが、人を訪ねて笑はせ樂ませようといふ氣に

もなりません。「巧言令色鮮仁」などといふ言葉が頭に浮んで來るのでどうも氣がさしていけないのです。社交の代りに讀書するのですから専門の本とは限らないので、人の譽めない本の中にも良い物が有りはせんか等と思つて、不評判の本を却つて讀んだり致します。讀む範圍はかなり廣い方でせう。

専門の本にしても、私のは落穂を拾ふ式で、世評の如何にかはらず廣く讀みます。同じ様な題目の本でも論文でも、皆夫々の偏りといふか重心の違いはあるものですから、全體としては不統一な、不均整な様な論文の中にも意外の拾ひ物をする事がよくあります。苟も署名して書く程の物には何等かの考へが有るのでせうからと思つて讀んでゆくと果して何物かを得る所がある様です。併し忙しい人には、そんな屑の中から掘り出し物を掘り當てる様な、まどろこしい事をせよといふのは無理な話で、良書を推薦するのが當然ですから、若い學徒には私の様な讀書法を御すゝめする氣は毛頭有りませんのです。

唯次の二、三點は私の學生時代に感じた事ですから、多少の参考にはならうかと思ひます。一つは私の中學三年の時の數學の先生が、大抵の數學教科書は、五分あれば讀めるものだと言はれた事です。多くの生徒は先生の氣焰として聞き流した様でしたが、私の胸にはピンと來るものがありました。頭を緊張させて前の教科書と異なる特色の所を味讀するといふ風にすれば、成



る程五分間もかゝれば、此の本も讀んだといひ得る所がつかめるかも知れぬと思はれたのであります。公理、定理といった様なものから成り立つ數學の教科書の様に簡単に片づけられぬ書物が多い事は勿論でありますけれども、頭を働かして要點をつかむといふ事は確かに讀書上の一つの「こつ」であると思ひました。

も一つ同じ頃に感じた事ですが、新渡戸稻造先生の本に、たしか英語なら英語の本を讀むにしても、たゞ正しく讀める（意味を理解する）といふだけでは自慢にはならないので、人が一頁讀む間に二頁讀めるといふ風に速く讀める様に努力しなければいけぬといふ様な事を教へられた事でした。大學生の様に澤山の参考書を必要とする場合になると字引を引き／＼讀む人と二倍も速く讀める人とは學業の進み方に大きな差が生じて來るでせう。大學といふ様な所に入つたら、もう見合の席に出た様なもので、先生は其の時代の出來不出來で、見込みを附けてしまひ易いのであつて、膝下をはなれて後も一生、學生時代の印象で世話をする傾向があります。卒業してからも勉強する人も有るもので、吳下の舊阿蒙にあらずといふ事も有るに相違ないのに、何時までも大學生時代を以つて批評されるのだからかなひません。（私の事を言つて居るのではないのです。）

も一つ學生時代に感じたのは論語の爲政篇に「學而不思則罔。思而不學則殆。」とあるのを讀ん

だ時の事でした。いくら讀書しても、批判力を働かして、熟考を加へて見なければ、論語讀みの論語知らずで、身に體得した知見とはならないし、又、反對に廣く色々な説を讀み比べて見ないと獨斷に流れて、見當はずれとなり、先人の知識を利用する事が出來ずに損をするといふ意味ではないかと思ひますが、飛行機を改良するにしても、先人の達した知識の上に工夫を積み重ねてすると、自分だけの考へで飛行機とにらめっこして居るのでは大變な違ひでせう。讀書家は研究しないし、研究家は讀書が足りないといふ話をよくききますが、どちらに偏するのも程度を越しては學者としてはいけないのではないせうか。

も一つこれに關連して想ひ起すは、私共教職にたづさはる者は大學で學んだ事だけ教へるといふわけにもゆきませず、自然讀書によつて得た知識をすぐに實地に活用する習慣になりますので、解剖などにしましても、解剖書を熟讀すれば、體内の何の邊に何が有るかといふ事が體がすき透つて見える様な氣持になり、それで大抵當りますし、テクニクにしましても、讀んだ所をすぐに實地に適用する外にないので、讀み方にそれだけの細心な注意を拂ふ様になつて参り、所謂獨學獨習的な習慣になつてゐますが、學生も一々先生に手をとつて證明して貰つた事でなくしても、直接讀書から得た所を活用して研究に成功する自信を養ふ必要があるのではないでせうか。書籍を自由に使ひこなす様にならないと師の膝下をはなれて獨立した時に困るでせう。



私の読書法といふ中には読書の際の行儀をも告白せよといふのかも知れませんが、それはまあ大町桂月先生から譽められる方かも知れぬとだけ申上げておきませう。

終りに私の今までに見た書齋の中で一番好もしく思つたのは、ポツダムサンソーシ内にあるフリードリッヒ大王の書齋でした。質素な八角か六角かの小ぢんまりした、天井の高い室でして、窓と壁とが互ひ違ひになつて居り、壁の所には書棚が取付けた様になつてをり、各窓の下に机があるから、机によつて仕事を分ける様にすれば、六つ位の仕事を、片づける手間いらずに、別々の仕事を續行し得るので、氣分の轉換に大變よからうと思ひました。あまり明るくもなく、はででもなくて落ちついて読書が續けられさうでした。王様物といふより私共にも手の届きさうなものだつたので大層心を動かされました。あゝいふ室で読書するとなれば桂月さんでも行儀よくやらざるを得ないでせう。

昭和十七年十月二十五日初版印刷  
昭和十七年十月三十一日初版發行

(三、〇〇〇部)

動物閑談  
定價一圓八十錢

著者 廣島市西白鳥町二一番地  
阿部余四男

發行者 株式會社 三省堂  
代表者 龜井豐治  
東京市神田區神保町一丁目一番地

印刷者 奈良直一  
會員番號 東東二一〇

(出文協承認)  
ア 40203 號

發行所 東京市神田區神保町一、一 株式會社 三省堂  
振替東京三一五五五  
大阪府西區阿波座下通二ノ六 株式會社 三省堂大阪支店

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社



古賀忠道著

# 私の見た動物の生活

四六判・二三四頁 別丁四〇頁  
定價 二・三〇 送料・一六

動物園では毎日新しいことが起る。この微妙な動物たちの心理や習性について、古賀園長が多年観察し得たものを収めたのが本書である。淡々たる筆致で、輕妙に動物の生活を描きながら、科學的な正確さと、精密さが、本書をして得難い觀察記録としてゐる。正にわが古賀園長にして、初めてものし得る興趣豊かな動物隨筆である。御一讀を薦める。

三 省 堂 刊

H-33

農學博士 石井悌著

# 武藏野昆虫記

四六判・二八四頁  
定價 一・六〇 送料・一二

武藏野に棲息する種々の昆虫について、多年觀察した著者が、或る時は讀物風に或る時は觀察的に描いた好隨筆集である。春夏秋の昆虫の順に並べてその一生を解説し、人類と昆虫との關係、昆虫と動植物の關係を始め、日本各地及支那南洋等に於て見聞した珍しい昆虫の特殊な習性等を淡々たる筆致を以つて描く。讀物として、また昆虫の觀察手引として一讀すべき好著である。

三 省 堂 刊

H-37



小野喜明・丘 直通 著

# 生物心理學概論

菊判クロス装・一九四頁函入  
定價 二・四〇 送料 二二

世界的に最も權威あるコロンビヤ大學のC・J・ウォールデン他二氏の原著を良心的に邦譯せるもの。動物心理學の入門書として究竟！

小野喜明・丘 直通 著

# 生物心理學各論

菊判クロス装・四四二頁函入  
定價 六・〇〇 送料 二〇

「生物心理學概論」の續篇として原著の各論を翻譯せるもの。生物界の各群につき感受能力と反應能力の典型的な資料を収めた貴重著。

三 省 堂 刊







終

